

博 多 70

—博多105次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第628集

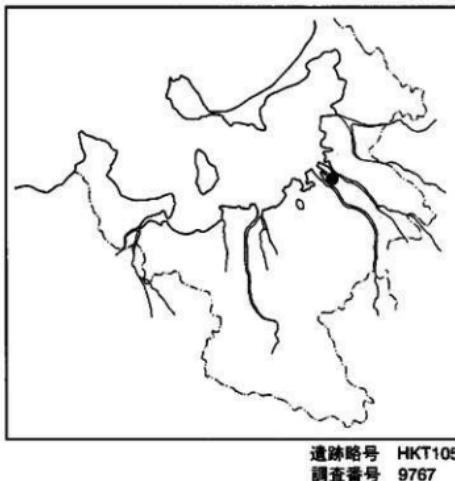
2000

福岡市教育委員会

博 多 70

—博多遺跡群第105次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第628集



遺跡略号 HKT105
調査番号 9767

2000

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めています。とくに都心部である博多部には、各種の開発事業による発掘調査において、歴史の博多商人のH覚ましい活動の跡をはじめさまざまな遺跡が見つかっています。

本書はそうした遺跡のひとつで、博多区冷泉町におけるビル建設に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果中世の各時期にわたる遺構、遺物が見つかりました。福岡市の原点ともいえる博多の町作りについて、貴重な資料を提供したと言えるでしょう。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた株式会社島津製作所を始めとする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会教育長 西 憲一郎

例　　言

1. 本書はビル建設に先だって、福岡市教育委員会が1998年1月23日～4月30日にかけて行なった博多遺跡群第105次調査の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、井戸1、土壙2のように記述する。
3. 本書で使用する方位は座標北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、中河秀崇、荒川直子が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井の他、当課職員中村啓太郎の協力を得た。また製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
6. 本書使用の写真は宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の番号は収蔵時の登録番号に一致する。
8. 本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本書の執筆、編集は宮井が行なった。

本文目次

第1章 はじめに	
I. 調査に至る経緯	1
II. 調査体制	1
III. 調査区周辺の地理的、歴史的環境	3
第2章 調査の記録	
I. 基本層序と調査面の設定	7
II. 調査の記録	7
(1) I面の調査	7
1. 概要	
2. 調査の記録	
(2) II面の調査	17
1. 概要	
2. 調査の記録	
(3) III面の調査	25
1. 概要	
2. 調査の記録	
第3章 小結	35

挿図目次

Fig. 1 調査地点(1:4000)	1
Fig. 2 調査区位置図(1:500)	2
Fig. 3 I面全体図(1:100)	4
Fig. 4 II面全体図(1:100)	5
Fig. 5 III面全体図(1:100)	6
Fig. 6 調査区土層図(1:50)	9
Fig. 7 I面の遺構実測図1(1:40)	10
Fig. 8 I面の遺構実測図2(1:40)	11
Fig. 9 I面の遺構実測図3(1:40)	12
Fig. 10 I面遺構出土遺物実測図1(1:3)	13
Fig. 11 I面の遺構実測図4(1:20)	14
Fig. 12 I面遺構出土遺物実測図2(1:3)	14
Fig. 13 I面遺構出土遺物実測図3(1:3)	15
Fig. 14 I面遺構出土遺物実測図4(1:3)	16
Fig. 15 II面の遺構実測図1(1:20)	18
Fig. 16 II面の遺構実測図2(1:40)	19
Fig. 17 II面遺構出土遺物実測図1(1:3)	21
Fig. 18 II面遺構出土遺物実測図2(1:3)	22

Fig. 19	II面遺構出土遺物実測図3(1:3)	23
Fig. 20	II面遺構出土遺物実測図4(1:3)	24
Fig. 21	III面の遺構実測図1(1:40)	26
Fig. 22	III面遺構出土遺物実測図1(1:3)	27
Fig. 23	III面遺構出土遺物実測図2(1:3)	28
Fig. 24	III面の遺構実測図2(1:40)	29
Fig. 25	III面の遺構実測図3(1:40)	30
Fig. 26	III面の遺構実測図4(1:40)	31
Fig. 27	III面遺構出土遺物実測図3(1:3)	33
Fig. 28	その他の遺物実測図(1:3, 1:2)	34

図版目次

Pl. 1 (1) I面全景(東から)	(2) II面全景(東から)
Pl. 2 (1) III面南半部全景(東から)	(2) III面北半部全景(東から)
Pl. 3 (1) 調査区西壁土層(2区)	(2) 調査区西壁上層(3区)
Pl. 4 (1) 調査区西壁上層(4区)	(2) 調査区西壁土層(5区)
Pl. 5 (1) 調査区西壁土層(6区)	(2) 遺構1(北から)
Pl. 6 (1) 遺構4(西から)	(2) 遺構7(北から)
Pl. 7 (1) 遺構21(南から)	(2) 井戸5(南から)
Pl. 8 (1) 土壙101(南から)	(2) 井戸102(東から)
Pl. 9 (1) 遺構114(北から)	(2) 遺構117(南から)
Pl. 10 (1) 遺構118(北から)	(2) 上塙120(東から)
Pl. 11 (1) 土壙135(南から)	(2) 土壙201(南から)
Pl. 12 (1) 土壙201遺物出土状況(南から)	(2) 上塙201上層
Pl. 13 (1) 土壙203(西から)	(2) 井戸205(南から)
Pl. 14 (1) 井戸205井筒(北から)	(2) 井戸249(西から)
Pl. 15 (1) 井戸249井筒(南から)	(2) 井戸249完掘(西から)
Pl. 16 (1) 井戸252(北から)	(2) 井戸255(西から)

第1章 はじめに

I. 調査に至る経緯

1997年8月26日付けで、株式会社島津製作所より、ビル建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが提出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である博多遺跡内に位置しており、隣接および周辺地域の開発においても遺跡が確認され調査が行なわれていることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて1997年9月16日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構、遺物が豊富に検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、株式会社島津製作所との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなった。調査は1998年1月23日に着手し、4月30日に終了した。

II. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（調査年度） 西澤一郎（整理年度）

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（調査年度） 山崎純男（整理年度）

第2係長 山口讓治（調査年度） 力武卓治（整理年度）

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 河野淳美（調査年度） 文化財整備課 宮川英彦（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗



Fig. 1 調査地点 (1:4000)

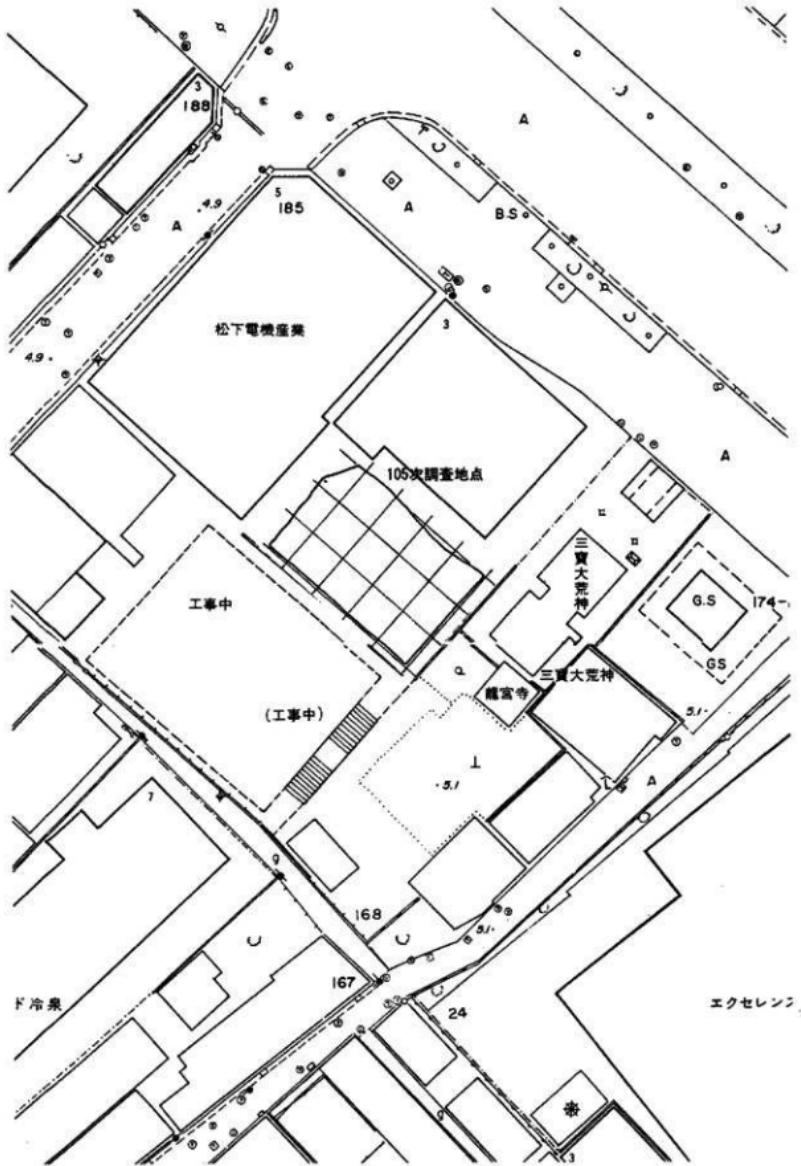


Fig. 2 調査区位置図 (1:500)

調査作業 野村道夫 楠林司朗 中河秀崇 脇山栄 小路丸喜人 村木義夫 森山祐子 古賀典子
持丸玲子 緑川ゆかり 石川洋子 鍋山治子 坂本俊子 穴井加奈子 馬目真吏 木村
义文 金子二枝 森教子 幸田信乃 塚本よし子 高木與志子 後藤タミ子 兼田ミ
ヤ子 野口リョウ子 柳瀬伸 小路丸良江 寺園忠美子 荒川直子

整理作業 大石加代子 林由紀子

また調査時の条件整備等に關して事業者の島津製作所、施工担当の大林組に多くのご配慮を戴った。また調査中には多くの方々のご教示を得た。記して感謝申し上げるとともに、本報告に十分生かせていないことをお詫びする次第である。

遺跡調査番号	9767	遺跡略号	HKT-105
調査地地番	福岡市博多区冷泉町4-20		
開発面積	706.40m ²	調査対象面積	221m ²
調査期間	1998年1月23日～4月30日		分布地図番号 49-0121

III. 調査地点周辺の地理的、歴史的環境

今回の調査地点は、祇園町交差点の北側、大博通り沿いの櫛田神社鳥居のやや南側に位置する。現在では都市化によりほぼ平坦な感を有する博多部であるが、街中を散策すればかなりの起伏があることに気付く。こうした現在の地形の分析と、各地点の既往の発掘調査、ボーリング調査の資料などから博多の旧地形がかなりの程度復元されている。その成果によると、博多遺跡群は大きくて3列の砂丘列とその間の低地部からなり、都市博多の拡大は、大雑把にいえば砂丘上から、低地埋め立てによる生活面の拡大と捉えることができる。3列の砂丘は陸側からそれぞれ砂丘1～3と名付けられている。

今回調査地点はちょうど砂丘1と、砂丘2の間の低地部に位置している。砂丘1は祇園町交差点付近を頂部とし、東側で砂丘2とつながる。構成物は粗砂であるが、遺構面として検出される砂層最上層には厚い風成砂が覆っている場合が多い。この風成砂は締まりがよく安定しており、古くから生活面として利用されている。砂丘2は櫛田神社北東から聖福寺方向へ伸びる砂丘である。この間の低地部は博多川が湾曲する櫛田神社付近を開口部とし、参道のやや南側を谷底としつつ南西～北東方向へ湾入する状況を示している。

砂丘1、2はともに弥生時代遺構が見られ、博多遺跡群では最も古く開発されている。従ってこの低地部への生活面の拡大も比較的早い。とくに古代においては、東西南北に直交する地割溝や大型の掘立柱建物が検出されており、官衙的施設の存在が想定されている。低地部の埋立てが始まるのもほぼこの時期とされ、参道沿いの103次調査地点では、地山砂層(河成砂) 上に8世紀の溝が検出されている。更に埋立てが進む次の面期は12～13世紀で、この低地を取り巻く砂丘斜面に位置する調査区ではいずれも該期に遺構、遺物が激増する。今回調査地点でも最下層の遺構面は該期と考えられ、周囲の成果と矛盾しない。更に14世紀には、この付近に鎮西探題が置かれたとされ、今回調査地点や、国体通り沿いの118次地点で検出されている大量の土師器壺の施णが、関連する遺構ではないかとする見解もある。

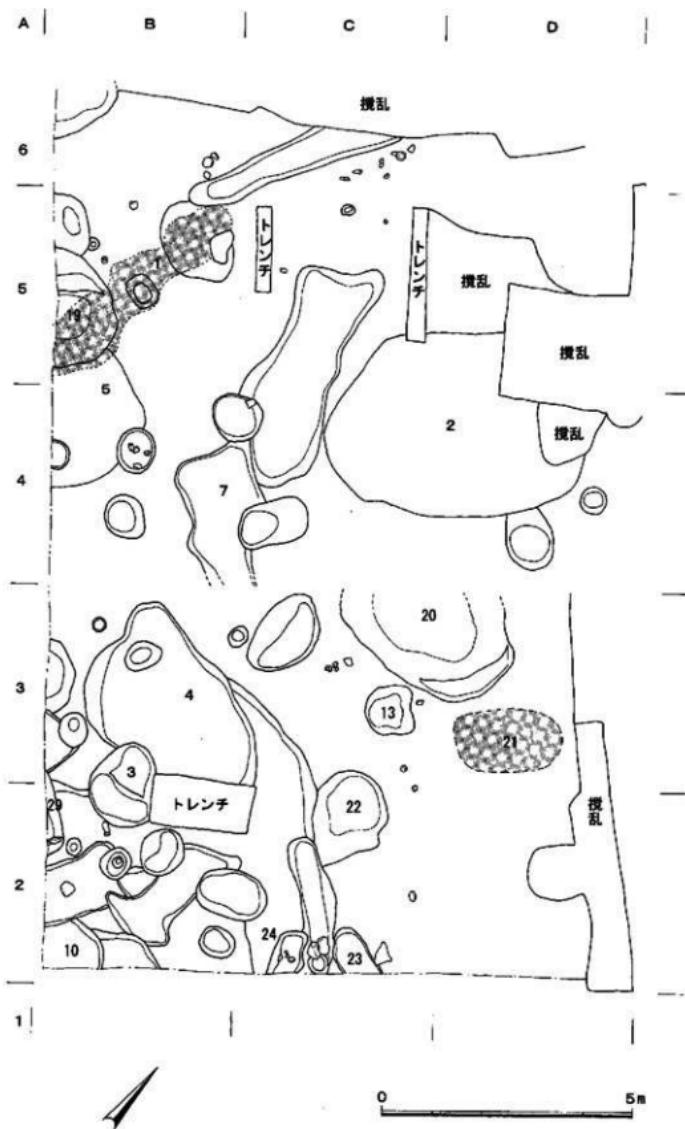


Fig. 3 I面全体図 (1:100)

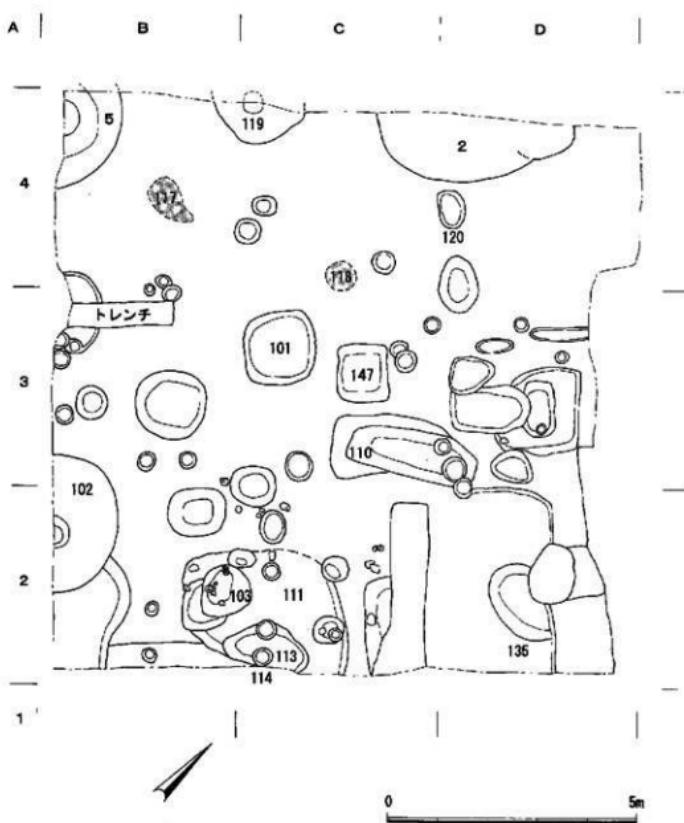


Fig. 4 II面全体図 (1:100)

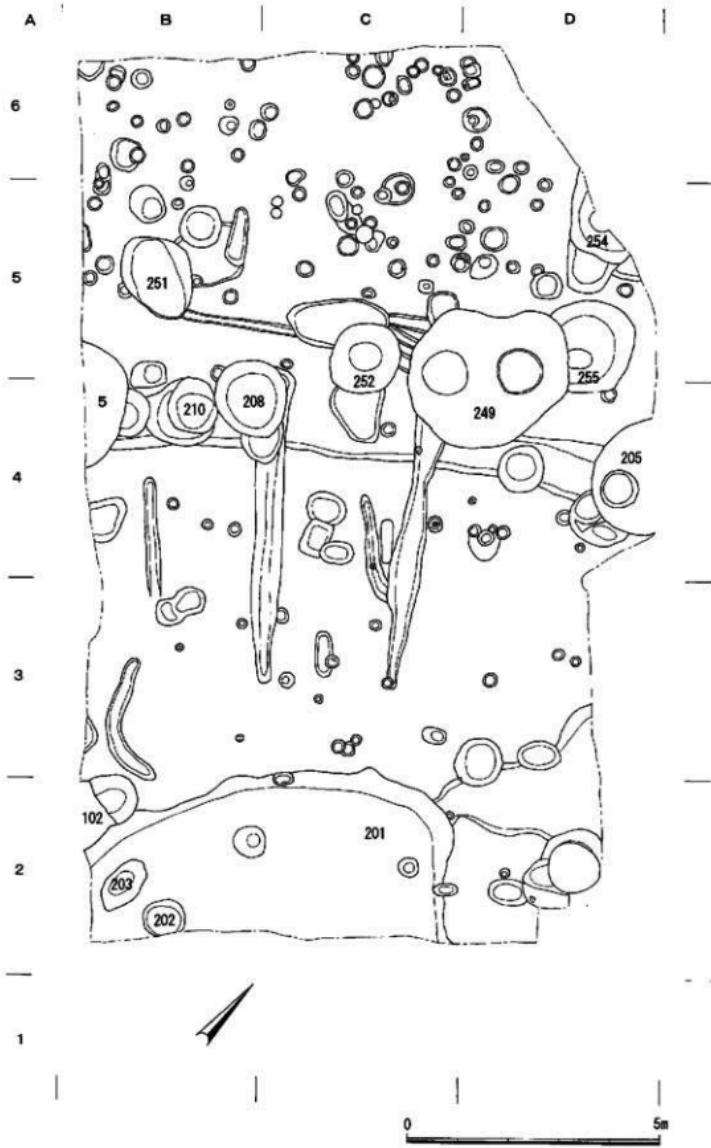


Fig. 5 III而全體図 (1:100)

第2章 調査の記録

I. 基本層序と調査面の設定 (Fig. 6, Pl. 3~5)

調査区西側壁の土層図をFig. 6に掲げた。図のように堆積土は大きく三層に分かれる。最下層の3層は地山である白色砂層である。この砂は粒度が粗くしまりがなく風成砂とは考えがたい。調査地点は先述したように第1砂丘と第2砂丘の間の湾入部にあたると考えられ、河成または海成と考えられる。この上層に乗る第2層は厚さ60cm程に及ぶ整地層である。炭、焼土、粗砂等が細かな互層をなしている。湾入部を埋め立てながら生活面を拡大する過程の堆積と考えられる。最上層は黒灰色から暗灰色のよく縮まる砂層で、2層の上層を更に埋め立てていったものであろう。I層の上層は水準ではないが、おおむね後世の搅乱層となる。

調査面はこの堆積状況を把握した後に設定したものではないので、若干ずれはあるが、おおむね以下の通りに設定されている。

I面はI層の上面を若干削り込んだ面である。標高3.4~3.5mほどである。この辺のレベルで土器が多量に出土しはじめたため、I面としたものである。遺構面は黒灰~暗灰色を呈し、遺構の検出は困難であった。II面は2層上面である。I層の暗灰色の縮まった砂を除去し、整地層らしき状況を呈したレベルで設定した。細かな互層を呈しているため、遺構面は場所によってさまざまであり、やはり遺構の検出は困難であった。この面で遺構としたものには、整地層の不整合面を誤認したものが多いと思われる。III面は時間的な関係から帳地層での精査を断念し、最下層の3層上面で検出を行なった。各遺構面の概要については、次節で述べることとする。

II. 調査の記録

(1) I面の調査

1. 概要

調査区は現地表下1.5m程度まで擾乱されており、これを事業者側にすきとつもらつた後30~40cm程掘り下げたレベルで土器類が多く出土しはじめたため、この面で設定した。標高3.4m~3.5m程度の面である。この面で検出した遺構は土器器窓りを中心とする。そのほとんどが不定形の掘方で、掘方不明のものもある。先述したように遺構面が黒灰~暗灰色のため、遺構の検出は困難で、遺構20のようにこの面では発掘できなかつたものもある。遺構2も床、壁とも判然としなかつたが、掘り下げるにつれ、井戸2基の切り合いであるのがわかつた。遺構5も同様に、II面まで掘り下げて、井戸であることがわかつた。ここでは井戸5の他、土器等の遺物が出土した遺構を中心に報告する。

2. 調査の記録

遺構1 (Pl. 5-2)

B5区を中心にして出土された土器器窓りである。窓方ははつきりせず、上層上でも土器器の集積として見られるのみである。土器器の散布範囲は幅1m、長4mほどである。方向はほぼ南北方向である。出土した土器器は、総じて破碎度が高く、固化に耐えられるもの、法量測定可能なものはない。

出土遺物 (Fig. 10)

1~4、8、10は小皿である。1は口唇部に縫が付着し、灯明皿として使用されたものである。3、4、8は口縫部の開きが大きく、2、10は口縫部が立つ。5から7は壺である。いずれも内底部に不定方向のナデが見られる。7は口縫部の張みが大きい。以上の土器器は底部はすべて糸切りである。9は丸底

を呈する椀である。半球形を呈する。以上の遺物の法量を表1に表示しておく。

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
1	7.4	5.4	1.7	10	8.0	6.2	1.1
2	7.4	6.0	1.5	5	12.2	7.8	2.8
3	7.0	5.0	1.0	6	11.6	8.5	2.3
4	8.0	6.2	1.5	7	13.0	9.0	3.0
8	8.6	6.6	1.0				

表1 遺構1出土土師器法量(cm)

土壤3(Fig. 7)

B2から3区にかけて検出した。卵型を呈する浅い土壤である。長1.65m、幅1.4m程度である。遺構4を切る。

出土遺物(Fig. 10)

49は上師器か焼きの悪い瓦器のようである。器壁は薄くて重い。口縁部を回転ナデ、その他をミガキもしくは丁寧なナデを施す。50~52は上師器坏、小皿であるが、いずれも糸切り底。法量は口径、底径、器高の順で、51が11.8、8.0、2.4cm、50が7.0、5.2、1.9cm、52が7.2、6.0、1.0cm。

遺構4(Fig. 8、PL. 1.6-1)

B、C-2、3区にかけて構状に検出した。長8.0m、幅3.0mほどを測る。西端部が一段低くなり、その部分に遺物が集中する。深いほうでも深さ20cm、東側の浅いほうでは10cmほどである。遺物は散漫に広がった状態で出土しているが、遺構1と異なり、比較的完形品や、大破片が多い。

出土遺物(Fig. 13)

図示した遺物のうち、小皿類は底部糸切りである。ただ、20のみはへラ切りのようである。26には底部板目が見られる。11は手づくねのへそ皿、30はコースター形を呈する。坏はすべて糸切り底である。16~18、28には板目がある。坏、小皿の法量は表2の通り。

また、図示していないもののうち、法量測定に耐えるものの平均値は、小皿口径6.9、底径5.6、器高1.5cm。坏は口径11.8、底径8.1、器高2.8cmである。

25は龍泉窯系の青磁碗。外面に錦蘿弁を描き、内底部にも文様を施す。疊付から外底部は露胎。12も青磁碗。同様に疊付から外底部は露胎。13は白磁碗。内底部は蛇の目状に釉をかきとる。

井戸5(Fig. 9、PL. 7-2)

B4、5区にわたって検出された。I面では土壤19に切られる不定形のプランで検出されたが、掘り進むうちに整が不分明になった(実際には掘り足らなかったとみられる)。II面ではほぼ円形で検出され、また井筒も確認できた。I面での掘方径2.8m、井筒径65cmを測る。深さは2m以上であるが、調査区境界に位置するため、崩落が起こり、安全のため先掘を断念した。井筒は土層で確認したのみで構造は不明である。

出土遺物(Fig. 10)

53は白磁の合子である。体部下半から底部と、受け部は露胎。その他は土師器の坏である。56は口唇部全面と内底部に煤が付着する。55も煤が付着している。法量は口径、底径、器高の順で54は12.6、8.5、2.9cm、55は12.1、8.4、3.0cm、56は復元で12.0、8.2、3.3cm。

遺構7(Fig. 11、PL. 6-2)

B4区で検出した。不定形の土壤である。10~20cmほどの浅い土壤で、西端は判然としない。長2.5、幅1.3mほどであろうか。土師器を中心とする遺物は中央部にまとまって出土している。完形品や、大破片が多い。

出土遺物(Fig. 12、13)

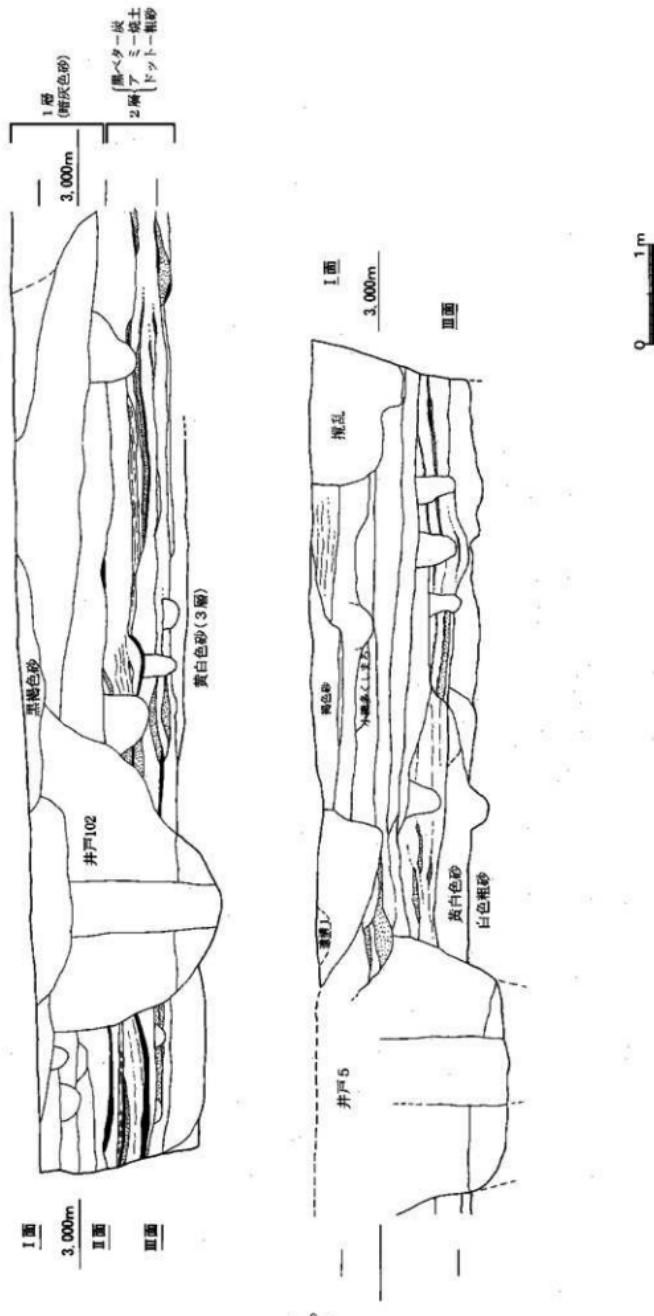


Fig. 6 調査区上層図 (1:50)

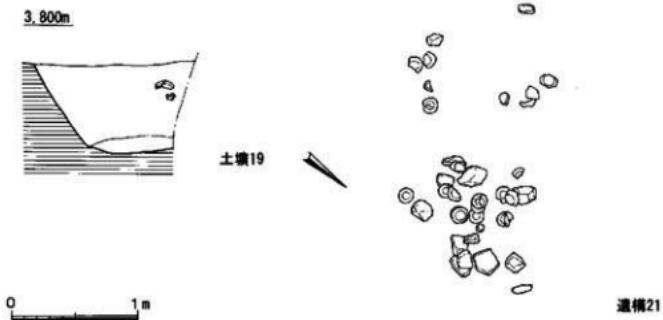
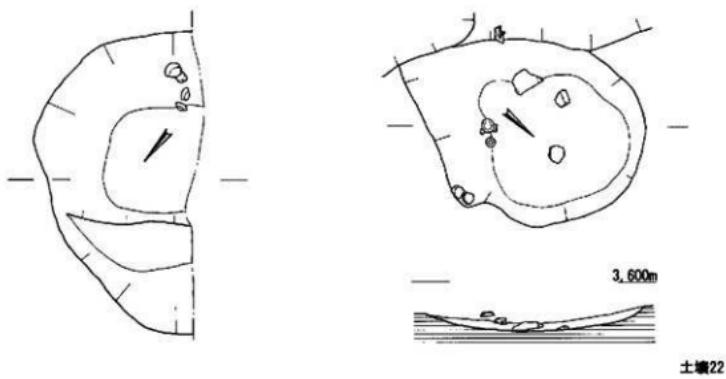
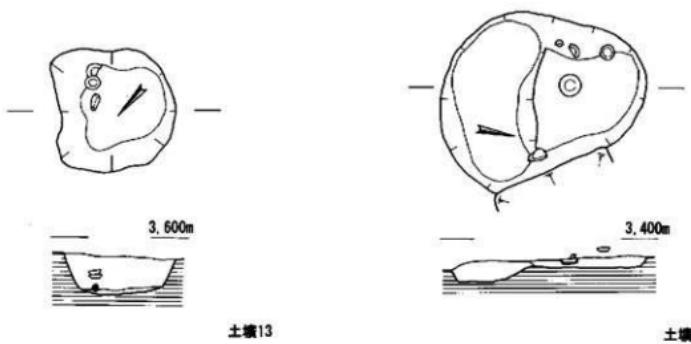


Fig. 7 1面の造構実測図 1 (1:40)

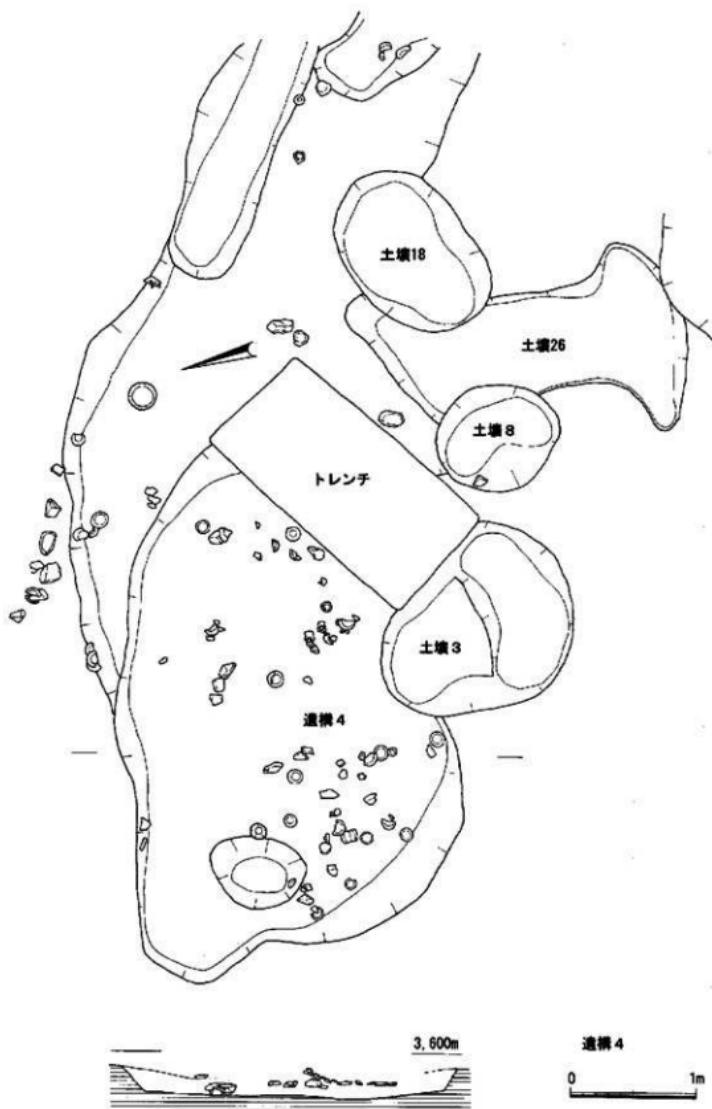


Fig. 8 1面の造構実測図 2 (1:40)

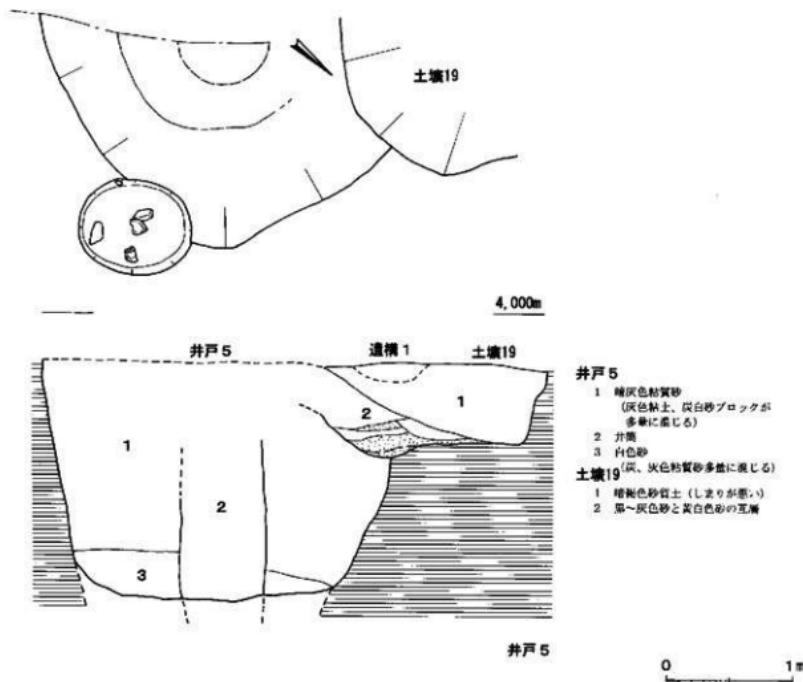


Fig. 9 1面の遺構実測図3(1:40)

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
14	6.4	4.8	1.6	15	12.1	8.5	2.7
19	8.0	6.1	1.2	16	11.6	7.6	3.0
20	7.1	6.2	1.0	17	11.6	8.0	2.3
21	6.1	4.2	1.3	18	11.7	7.7	2.5
26	7.9	6.4	1.4	22	11.4	8.0	2.8
27	6.1	4.8	1.5	23	12.6	8.6	2.8
31	8.3	6.1	1.5	28	11.8	8.8	2.5
32	7.5	5.3	1.3	29	11.6	8.4	2.5
33	6.3	5.9	1.1	24	14.0	9.2	3.8
34	7.0	5.1	1.8				

表2 遺構4出土土器器法量(cm)

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
35	12.0	7.7	2.8	41	11.4	7.2	2.4
36	12.1	8.4	2.6	43	11.4	8.3	2.5
37	11.8	7.9	2.5	44	11.6	7.8	2.7
38	11.8	7.9	2.5	45	11.8	8.6	2.5
39	11.8	8.3	2.5	46	11.4	8.0	2.8
40	11.6	7.4	2.5				

表3 遺構7出土土器器法量(cm)

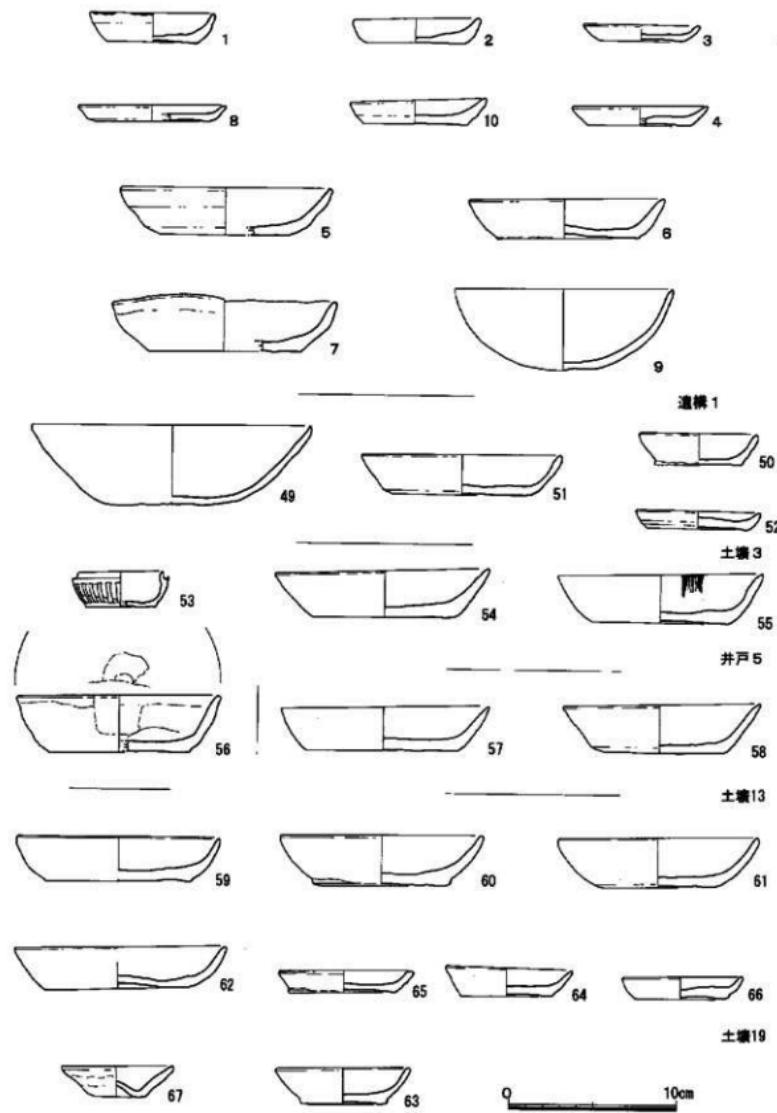


Fig. 10 I面遣拂出土遺物実測図 1 (1:3)

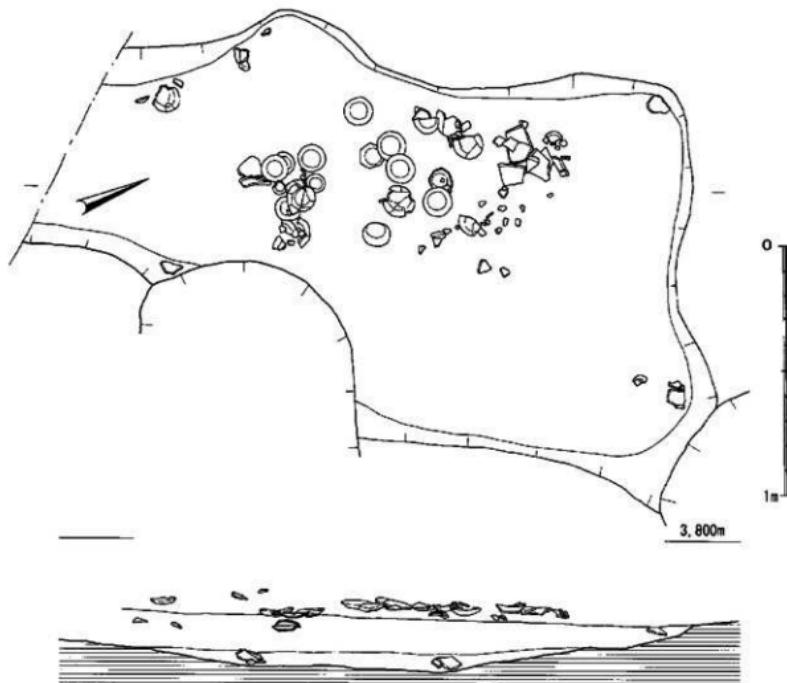


Fig. 11 I面の遺構実測図 4 (1:20)

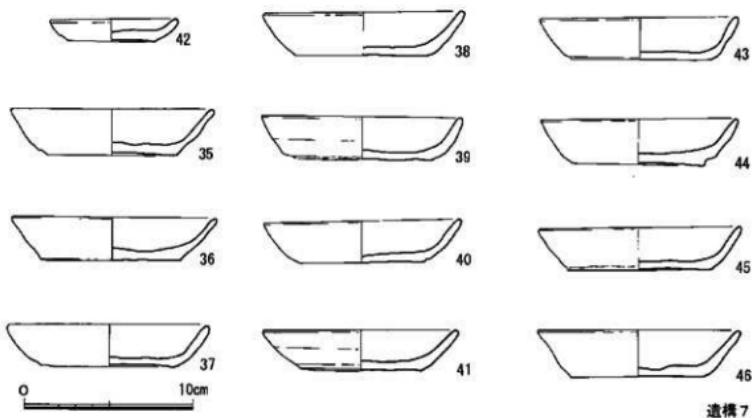


Fig. 12 I面遺構出土遺物実測図 2 (1:3)

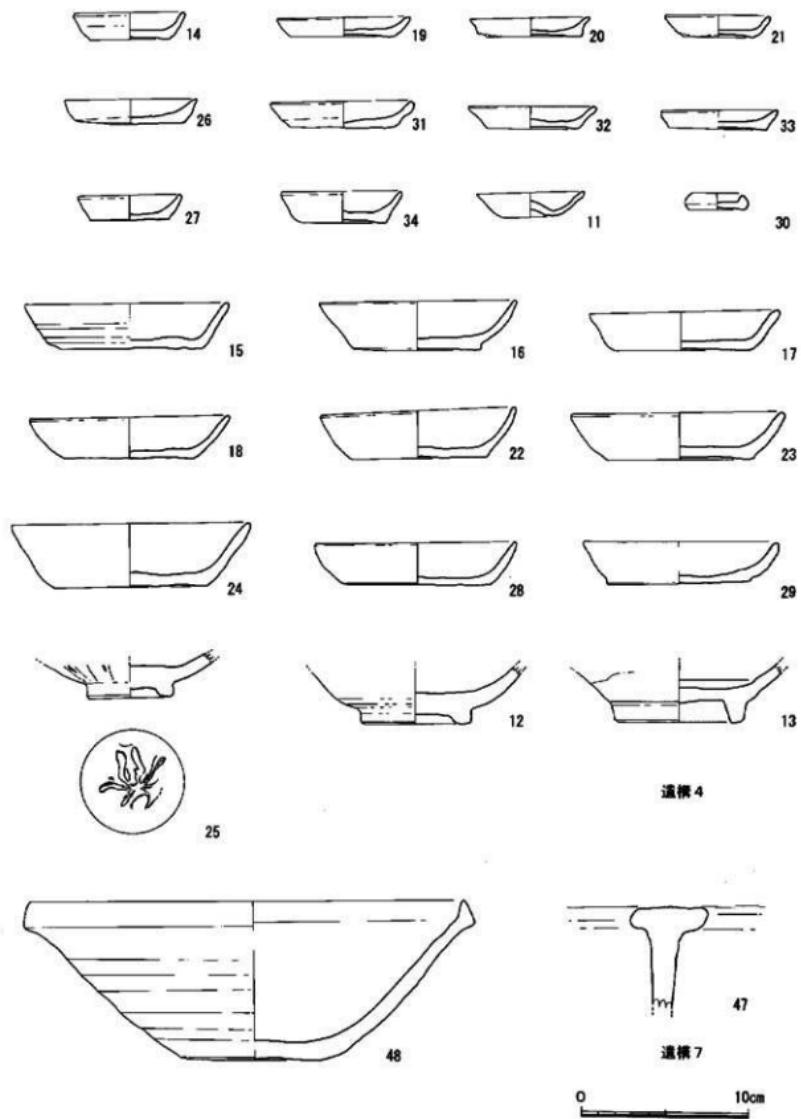


Fig. 13 I面遺構出土物実測図 3 (1:3)

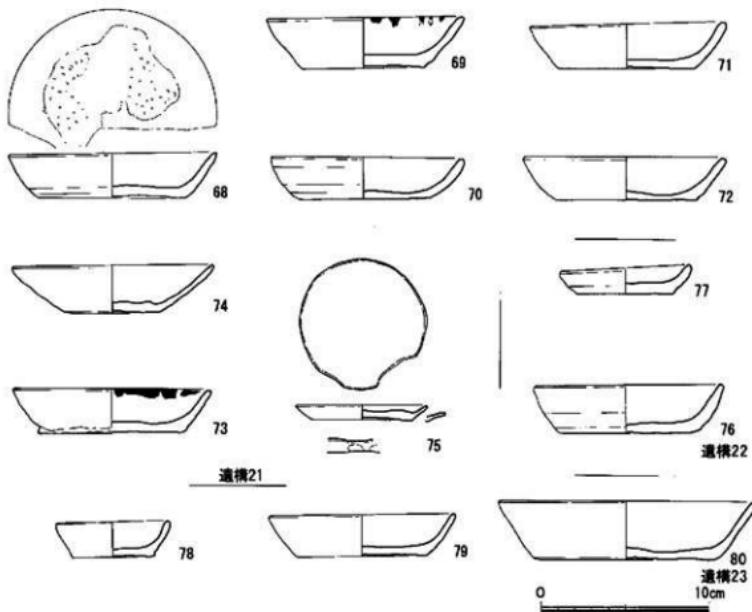


Fig. 14 I面遺構出土遺物実測図 4 (1:3)

42は小皿、35～41、43～46は壺である。底部はいずれも糸切りである。42の小皿は口径7.4、底径5.2、器高1.3cmを測る。壺の法量は表3の通り。口径が非常に近いものが多い。

なおこの他、法量測定に耐える壺の平均値は口径11.8cm、底径7.8cm、器高2.6cmである。

F i g . 13の48は須恵質の鉢である。束縛系であろう。底部に糸切り痕がみられる。47は魔器の壺口縁部である。かなり大形品である。

土壤13 (F i g . 7)

C 3区で検出した。円形に近い土壤で、深さ30cmほどを測り、比較的深いほうである。径は1.0m程度である。遺物は土師器が中位から出土している。

出土遺物 (F i g . 10)

57、58は上師巻壺。58はやや体部が開く器形である。法量は口、底、器高の順で57が12.4、9.0、2.6cm、58は11.8、7.0、2.9cmである。

土壤19 (F i g . 7)

B 5区で検出した。井戸5を切る土壤である。また遺構1はこの遺構が埋まつた後の廃棄である。ほぼ円形と考えられる。径は2.4m程度であろう。掘鉢状を呈し、深さは70cm程度である。

出土遺物 (F i g . 10)

図示した遺物はすべて十師器である。59～62は壺である。体部が開く器形のものが多い。法量は口、底、器高の順で59が12.0、8.4、2.7cm、60が12.0、8.2、3.1cm、61が11.8、6.6、2.9cm、62が12.4、8.4、2.5cmを測る。63から66は小皿である。63はやや深い器形のものである。法量は63が7.8、5.1、2.2cm、

No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
68	12.3	8.8	2.6	72	11.6	8.2	2.6
69	11.5	7.3	3.6	73	11.6	8.6	2.5
70	11.2	7.7	2.5	74	11.8	5.8	2.8
71	11.4	8.0	2.6				

表4 遺構21出土土師器法量(cm)

64は7.5、5.4、2.7cm、65は7.9、6.3、1.3cm、66は6.9、5.2、1.3cmを測る。以上の土師器類の底部はすべて糸切りである。67はへそ皿である。外面に指頭による凹凸がみられる。

遺構21(Fig. 7 P1.7-1)

D3区で、穂と十師器が集中して出土する箇所があり、これを遺構21とした。1m四方程の範囲に集中するが、壠などは検出できなかった。上師器の出土状況は、完形品や、大破片が多い。

出土遺物(Fig. 14)

図示した遺物はすべて上師器である。75は小皿である。口縁端部の一部を外側へつまみ出し、片口状を呈している。口径7.6、底径5.8、器高0.9cmを測る。底部は糸切りである。68~74は壺である。底部はいずれも糸切りで、70には板目が見られる。74は底径が小さく体部が大きく開く。また色調も明るい赤褐色を呈し、他の壺と趣を異にする。69、73は口縁端部に煤が付着する。また68の内底部には粒状の炭化物が付着し、穀物を燃やしたような状況である。十師器壺の法量は表4のとおりである。

またその他の法量測定可能な壺の平均値は口径11.7、底径7.9、器高2.8cmを測る。

土壙22(Fig. 7)

C2、3区で検出した。楕円形を呈する土壙である。遺構4に切られる。長径2.0m、短径1.5m程を測る。浅い皿状を呈し、深さは20cm程である。穂、土師器等が出土している。

出土遺物(Fig. 14)

77は十師器小皿。底部は糸切りである。口径7.6、底径5.8、器高1.6cmを測る。76は上師器壺。底部は糸切りで、板目がみられる。口径10.8、底径8.0、器高2.9cmを測る。

この他にも、とくに集中や一括性を見せていないが、遺構23、24などからも遺物が相当量出土している。また遺構21のような掘方を見られないものではC3区、C6区などにも散漫な分布が見られる。C6区のものは遺構1の延長かもしれない。

Fig. 14の78~80は遺構23出土の上師器である。いずれも糸切り底である。78の小皿は口径が小さく深い器形を示す。口径6.4、底径5.0、器高2.0cmを測る。79は口径10.8、底径7.7、器高2.5cm。80は大形品で、口径15.0、底径10.5、器高3.5cmを測る。

(2) II面の調査

1. 概要

II面は標高2.7~2.9m程のレベルで設定した。炭、焼土、砂などが細かい互層をなす面である。この面では井戸、土壙、土器割り等を検出したが、土器が集中して出土した遺構や、大形の遺構である井戸等を除いて、床、壁が判然とせず、遺構かどうか明らかでないものが多い。これは整地層の不整合面の凹凸が、検査面に表れ、遺構と誤認したものが多いためと考えられる。ここでも、比較的多く遺物を出土した、確実な遺構を中心に報告する。なおこの面では北西側にいくにつれ、遺構が少なく、また遺構が比較的深いと思われたため、廃土置場についていた5、6区については、3面と同時に調査を行なった。

2. 調査の記録

土壙101(Fig. 15, P1.8-1)

C3区で検出した。隅丸方形を呈する。径は1.5m程である。北側に土師器の集積が見られ、完形品が多い。土壇の深さ自体は10~20cm程である。

出土遺物 (Fig. 17)

図示した遺物はすべて土師器である。87は小皿。底部薄く、体部が厚い。底部は糸切り。口径7.9、底径6.4、器高1.2cmを測る。81~86は甌である。81は大形品である。86のように体部が開くもの、84のように丸く立ち上がるものがある。法量は表5の通りである。この他法量測定に耐えるものの平均

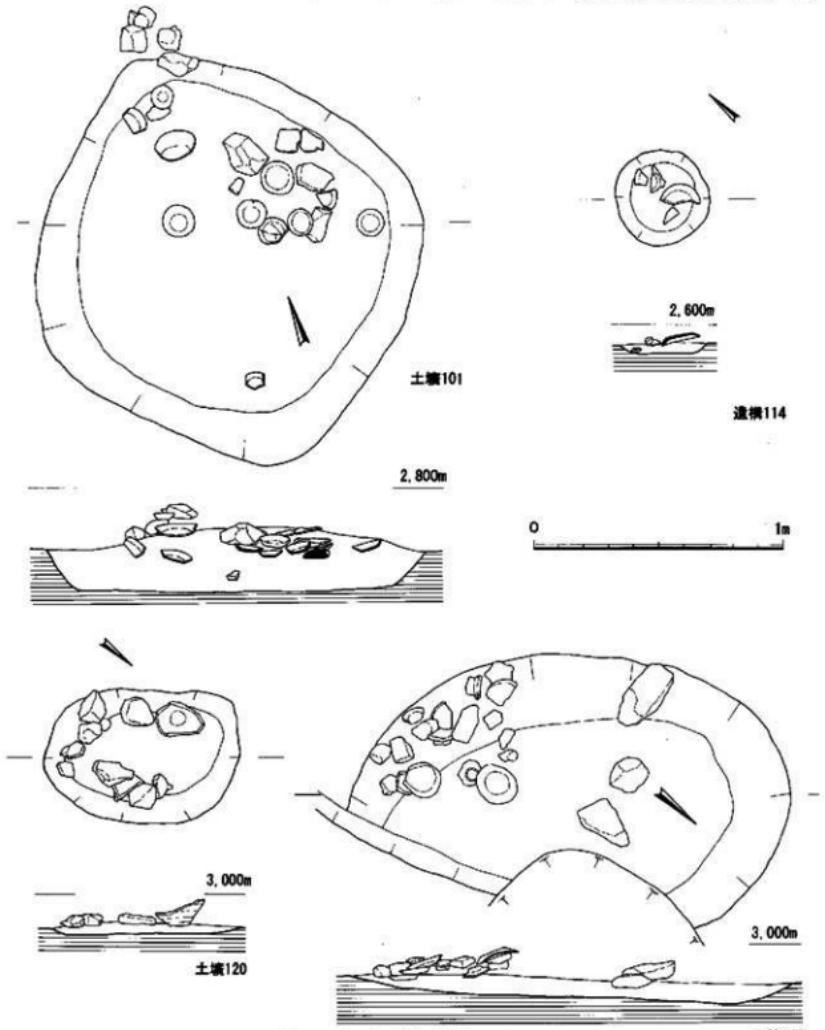


Fig. 15 II面の遺構実測図 1 (1:20)

No.	口 径	底 径	器 高	No.	口 径	底 径	器 高
81	14.1	10.3	3.7	84	11.2	8.2	3.3
82	12.2	8.7	2.9	85	11.4	8.0	2.8
83	11.9	8.0	2.7	86	12.8	7.9	2.8

表5 土壌101出土十十師器法量(cm)

値は口径11.5、底径8.0、器高2.8cmを測る。

井戸102 (Fig. 16, P 1.8 - 2)

B2、3区で検出した。2面で検出したとはいって、調査区土層で見るとおり、遺構29や遺構10などいくつかの土壤に切られてはいるが、1面の遺構である。ほぼ均整な円形を呈し、径2.8m程を測る。掘方のやや南側によって井筒がある。上層の上では木質が見られるが、構造は不明である。井筒径は50cm程である。深さは1面から1.9mを測る。

出土遺物 (Fig. 17)

88は白磁の碗である。口縁部はわずかに薄くなる単口縁である。見込は平らで広い。内面中位に沈

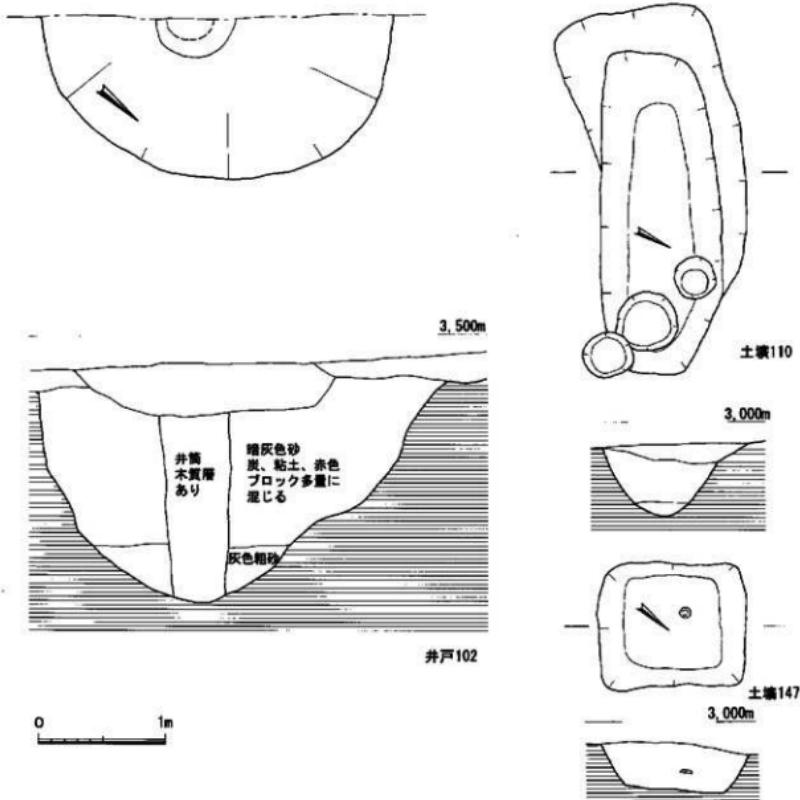


Fig. 16 II面の遺構実測図2 (1:40)

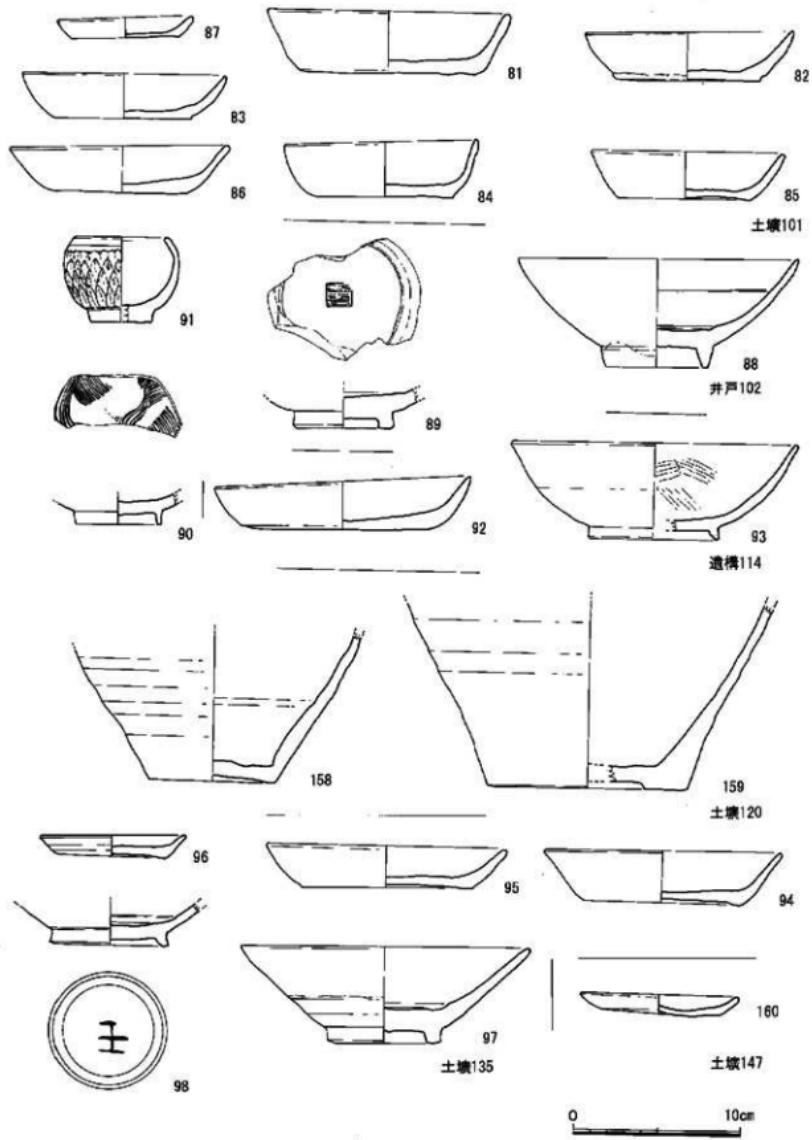


Fig. 17 II面遣情出土遺物実測図 1 (1:3)

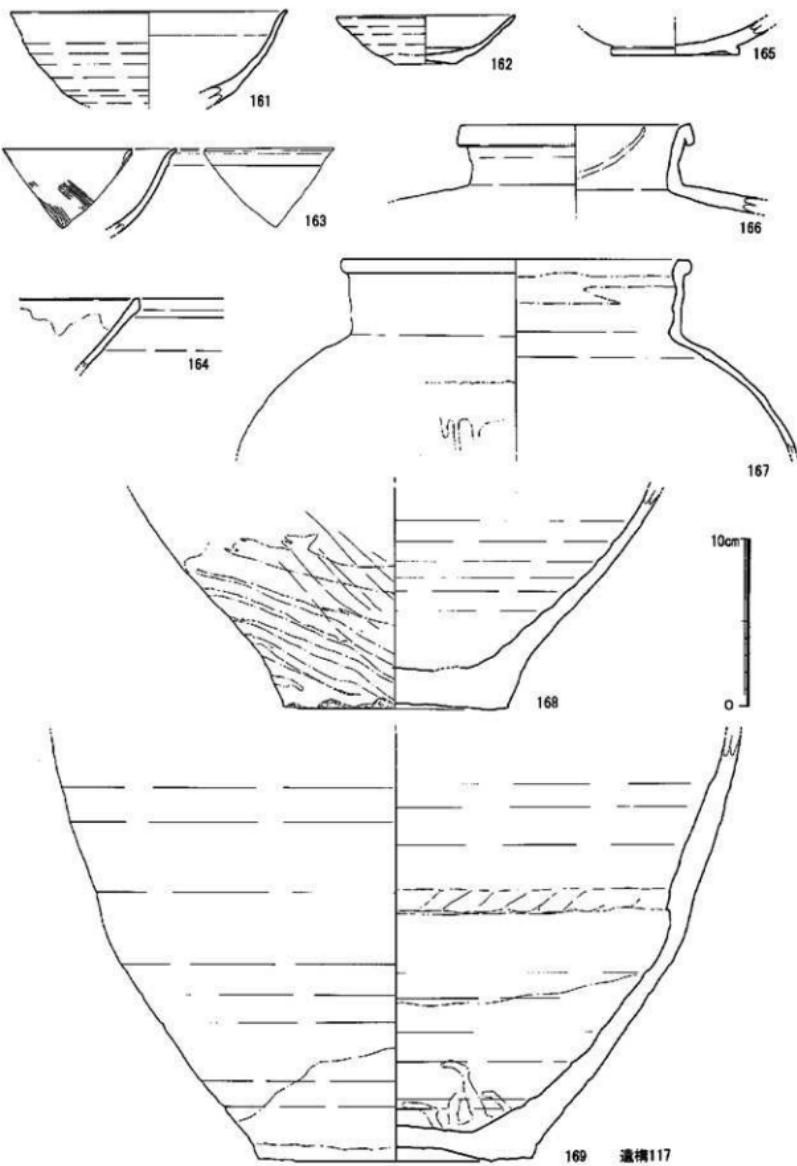


Fig. 18 II面遺物 (Fig. 2) (1:3)

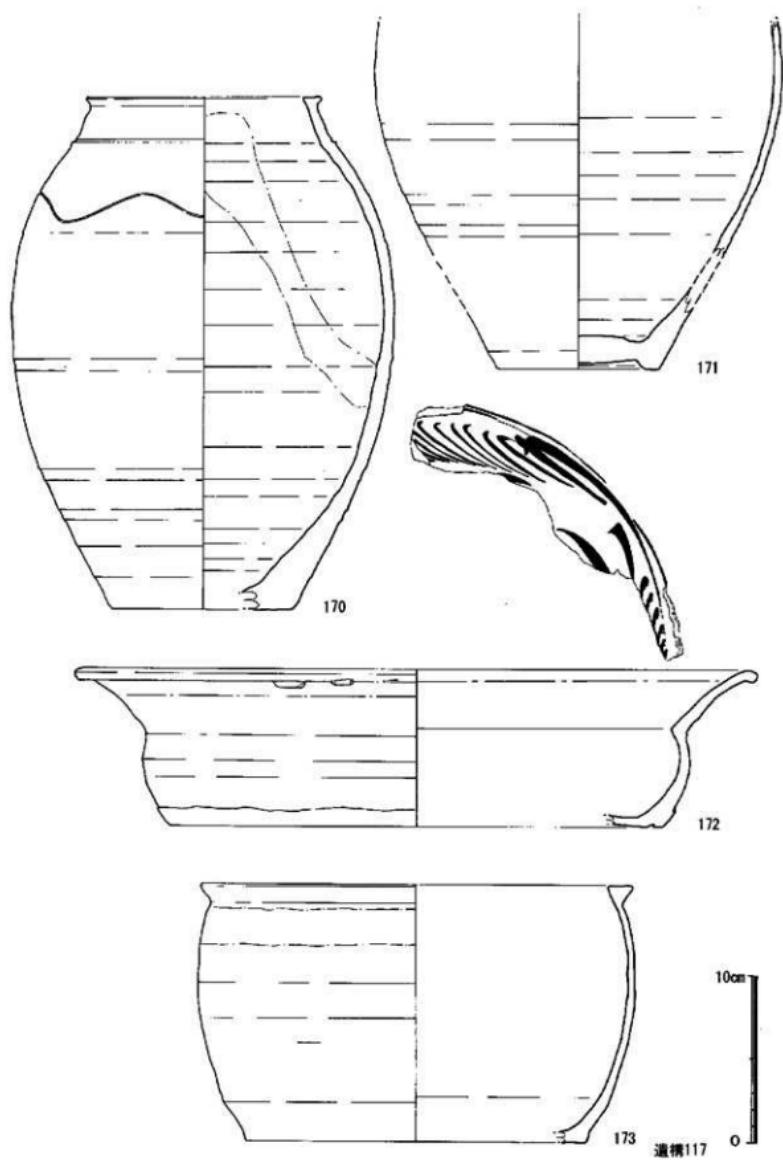


Fig. 19 II面造構出土遺物実測図 3 (1:3)

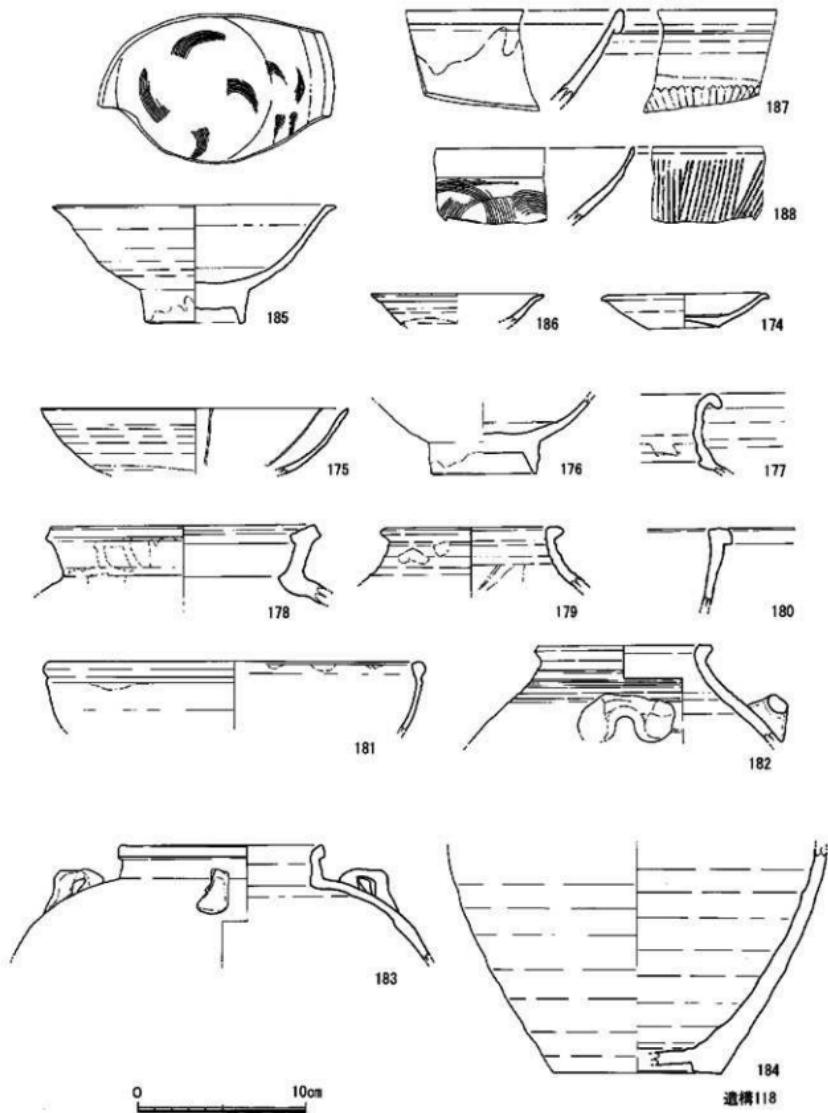


Fig. 20 II面造構出土遺物実測図 4 (1:3)

けて釉がとんでいる。177は白磁の壺口縁である。口縁は折り返している。178から184は陶器である。178は短頸壺である。砂粒が多いが比較的緻密な胎土に、外面には赤褐色の釉を施す。口縁端部は拡張して内傾させる。179も壺。耳が付く可能性が高い。胎土は精良で密である。純い緑色の釉を施す。180は鉢であろう。口縁は断面方形で、口縁から内面にかけて明るい緑灰色の釉を施す。181は鉢である。端部は丸みを帯びる。砂っぽい胎土に緑灰色の釉を施す。端部内面に目跡が見られる。182は四耳壺である。緻密な胎土に暗緑色の釉を施す。耳の付近にヘラ描きの波状文を巡らすようである。183も四耳壺であろう。肩が張り、縱方向の耳が付く。外面から口縁内部にかけて褐色の釉を施す。184は壺底部である。低い高台状を呈する。胎土は比較的緻密で、外面は明るい黄褐色を呈する。

土壤120 (Fig. 15, Pl. 10-2)

D 4区で検出した。楕円形の土壤である。長径80cm、短径50cm程度を測る。深さは10cmほどで浅い。壁に沿って礫や陶器が出土している。

出土遺物 (Fig. 17)

158、159は陶器の底部である。158は砂の多い胎土である。遺存部については無釉のようである。159はやや密な胎土である。暗赤褐色を呈する。

土壤135 (Fig. 15, Pl. 11-1)

D 2区で検出した。楕円形を呈する土壤である。長径1.7m、短径1m程度を測る。深さは10cm程度と浅い。内側を中心に礫、遺物が出土している。

出土遺物 (Fig. 17)

94、95は土師器底である。底部は糸切り。法量は口径、底径、器高の順で、94が14.0、9.3、3.0cm、95が14.0、10.0、2.5cmである。96は小皿。底部糸切りで口径8.4、底径6.3、器高1.3cmを測る。97は白磁碗。器壁は厚く、体部は直線的に開く。見込の釉を蛇の目状にかきとる。内面は火を受けている。98も白磁碗。高台はやや華奢な感を受ける。見込の釉を蛇の目状にかきとる。外底部に墨書きがあり、類例の多いことから「正」と考えられるが、「壬」かもしれない。

土壤147 (Fig. 16)

C 3区で検出した。方形を呈する土壤である。長1.2m、幅1m程度を測る。深さは30~40cmである。ほぼ中央に土師器小皿が1個完形で出土した。

出土遺物 (Fig. 17)

160は土師器小皿である。底部はヘラ切りで強い坂目による凹凸が顕著である。口径9.4、底径7.2器高1.2cmを測る。

(3) III面の調査

1. 概要

III面は最下層の黄白色砂層上面である。標高は2.1~2.0mである。主な検出遺構は井戸、土壤、溝、ピットである。このうち井戸の多くは上面からの掘り込みであると考えられる。確実にIII面からの掘り込みである遺構は、溝、ピットのほとんどと、大形の廃棄土壤と考えられる土壤201である。ここではこの土壤と、井戸を中心に報告する。

2. 調査の記録

土壤201 (Fig. 21, Pl. 11, 12)

B~C 2区で検出した。浅く大きい凹み状の土壤である。調査区の南へまだ広がるようであり、長7.4m以上、幅3.3m以上を測る。覆土は木片、木塊を多量に含む粘質土と、妙の互層をなす。深さは20~30cmである。床面にはいくつかピット状の土壤(202、203など)があるが、そこにも木質、遺物など

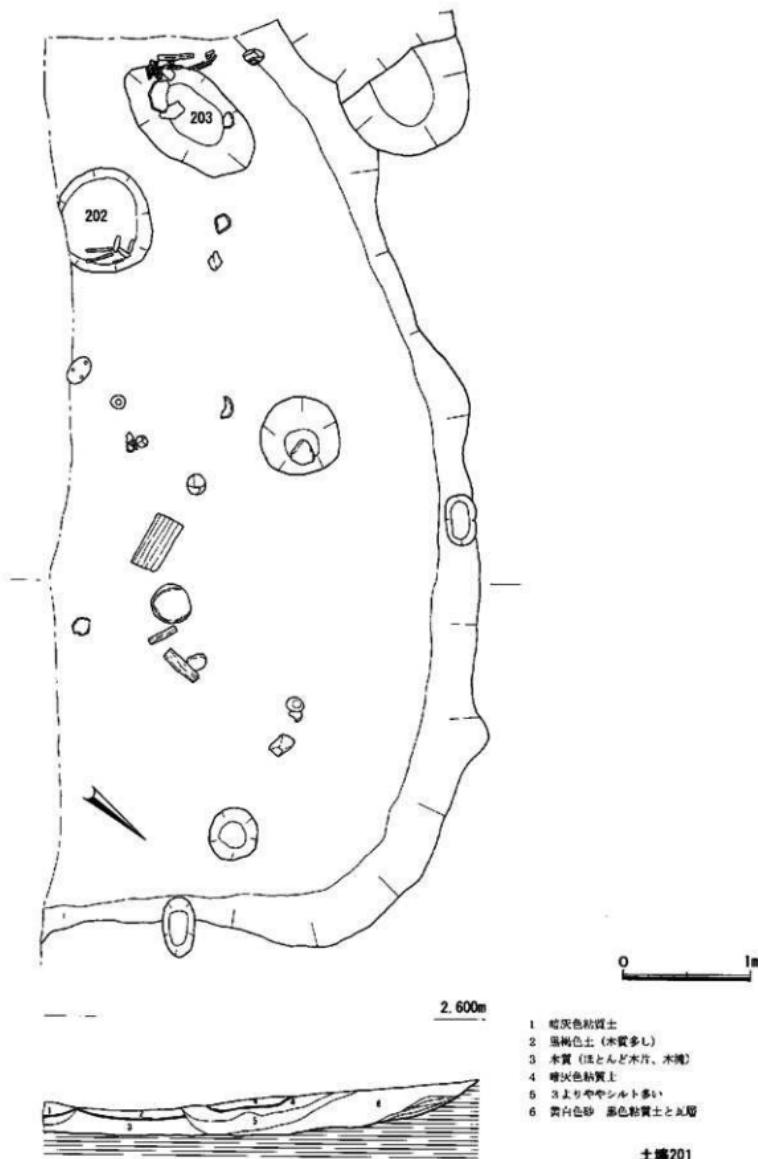


Fig. 21 III面の遺構実測図 1 (1:40)

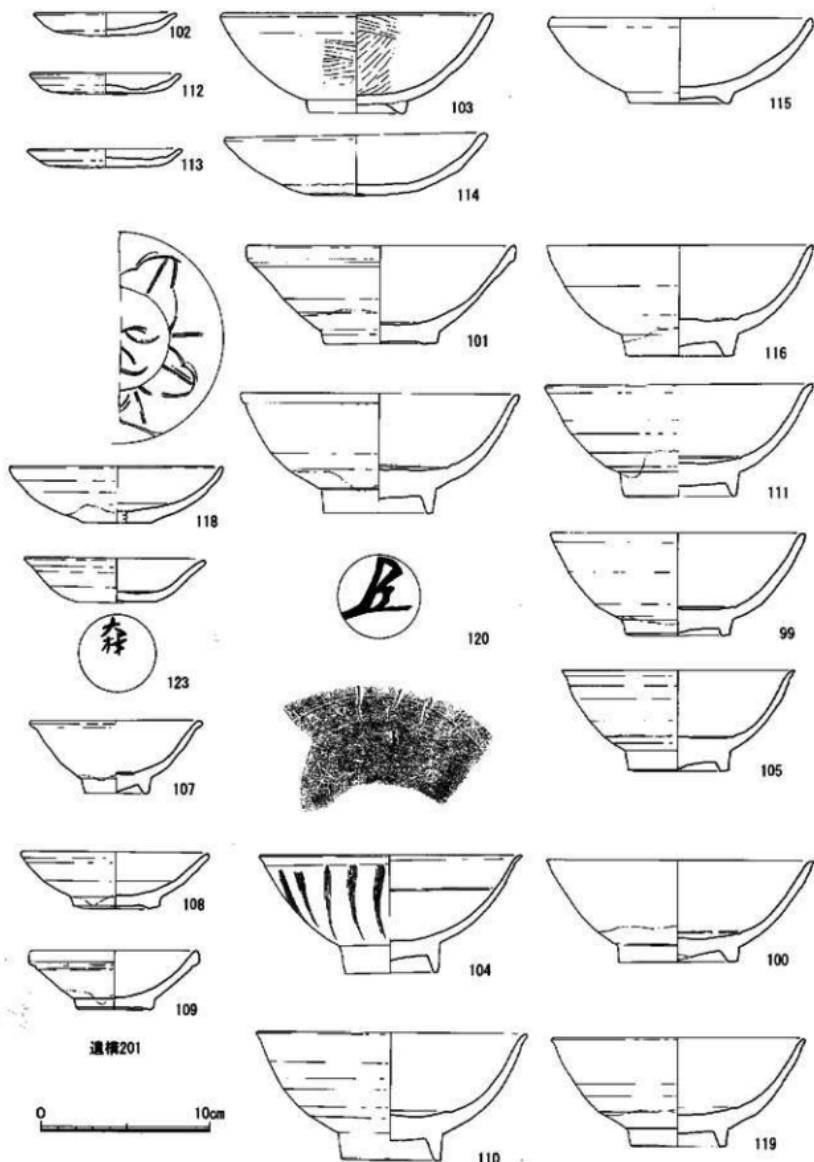


Fig. 22 Ⅲ面造構出土遺物実測図 1 (1:3)

が出土している。この木質層の中には瓜科の種子など食物残滓が多く見られる。現段階では分析などは行なっていないが、汚穢等の廃棄物の廃棄土壌ではないかと考えられる。

出土遺物 (Fig. 22)

102, 112, 113は十師器小皿である。底部はヘラ切りで、112, 113には板目がみられる。法量は口径、底径、器高の順で、102が8.4、6.0、1.3cm、112が8.8、5.0、1.2cm、113は9.0、6.4、1.1cmを測る。103, 115は瓦器碗。103は炭素の付着が十分でなく、土師質を呈する。体部側の高台接合線がナデ消されずに明瞭に残る。高台を含む外底部と口縁部は回転ナデ、その他はミガキを施す。115は内面はミガキ、外面は回転ナデを施す。114は丸底坏である。底部はヘラ切りで、板目がみられる。口径15.3、器高3.6cmを測る。Fig. 22の下段はすべて白磁である。118は平底の小皿。端部は内湾する。内面にヘラ描きの花卉文を施す。外面体部下半から底部にかけて露胎。123は体部がやや外反する。外底部に墨書きがあり、「大林」と思われる。外底部は露胎。107, 108, 109は高台を持つもの。107は小碗といえるようなやや深い器形である。端部が折り返し気味に端反りになる。108は見込が丸みを帯び広い。

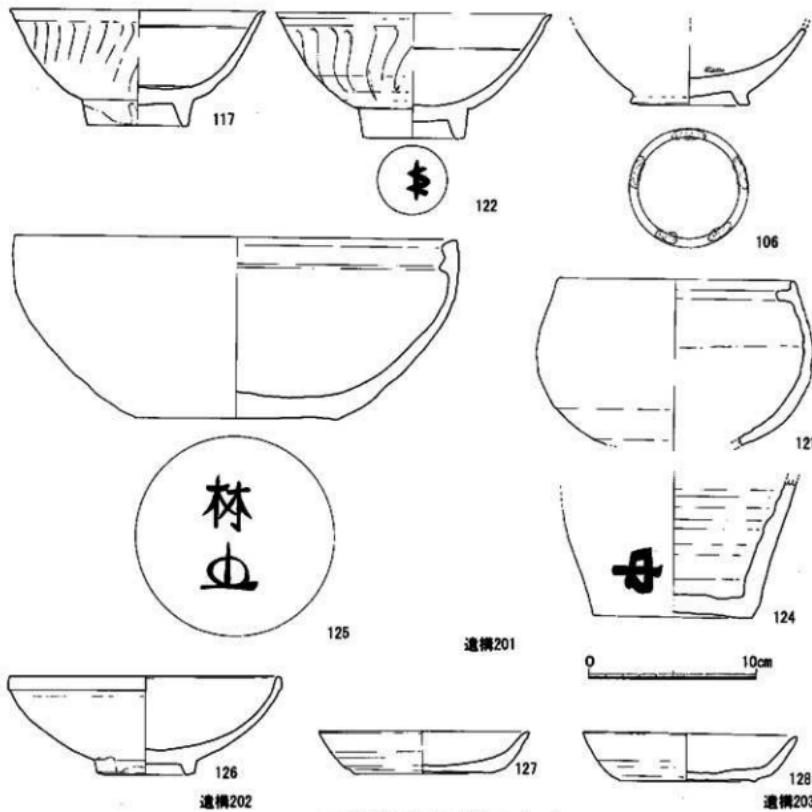


Fig. 23 III面遺構出土遺物実測図 2 (1:3)

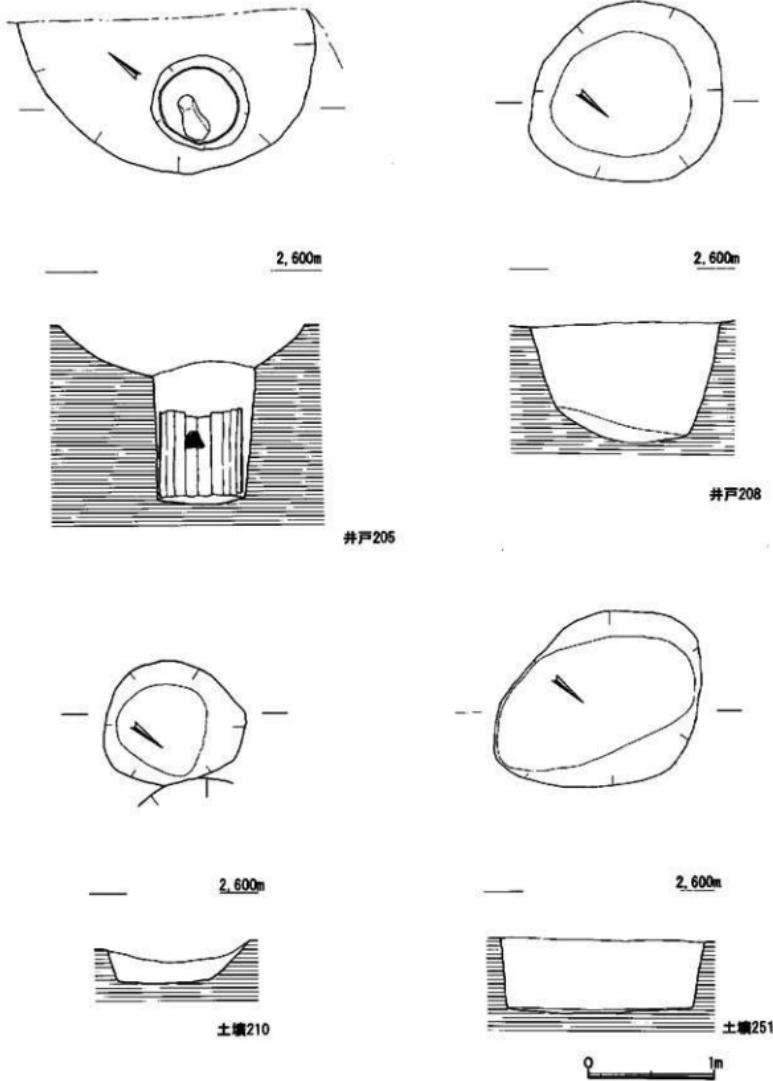


Fig. 24 III面の造構実測図 2 (1:40)

109は口縁口縁の小皿。いずれも外底部は露胎である。101は玉縁口縁の白磁碗。高台は低く底部が厚い。120は口縁端部が段が付いて肥厚する。外面は釉の冰裂が著しい。外底部に墨書があり、花押と考えられる。116、111、99は単口縁の白磁碗。111は内面の釉に冰裂が著しく、また火を受けている。100、104、105、110、119、Fig. 23の117、122は口縁端部が薄くなり、端反りになる白磁碗である。104は外面に多条の櫛描文、内面に線刻を施す。漢字と思われるが判読不明。最も残りのよい字は「京」

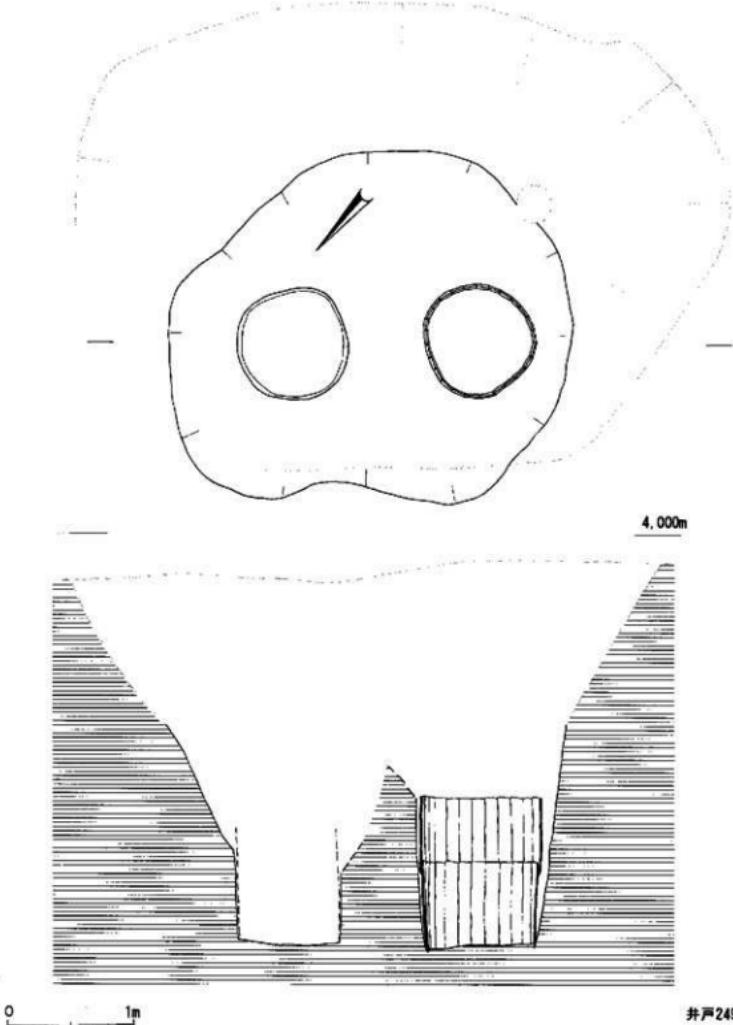


Fig. 25 Ⅲ面の遺構実測図3 (1:40)

」や「倉」に似ている。火を受けている。105はやや小形。100は内外の釉に氷裂が著しく、外底部に煤が付着している。完出品で出土した。117、122は外面に曲線文を刻む。体部内面に沈線が巡る。122は外底部に墨書きがある。判読できないが、文字であろう。106は青磁である。緑灰色の釉で、豊付のみ露胎である。内外の底部に目跡が5か所づつみられる。125は陶器の鉢である。口縁内面に突帯が2条巡る。無釉で暗赤褐色を呈する。底部は平底で、墨書きを持つ。「林(花押)」とよめる。121は小形の鉢。口縁内面に蓋受けの突帯を巡らす。胎土は砂粒が多いが比較的緻密である。釉は褐色で、体部内面は露胎。124は壺底部、わずかに上底を呈する。外面に横向きに「中」の字を墨書きする。126は遺構202出土の白磁碗。体部は丸く、口縁は小さいU縁になる。127、128は遺構203出土の土師器壺。底部は糸切りで、128には板目がみられる。法量は口径、底径、器高の順で、127が12.4、8.2、2.5cm、128が12.6、8.0、2.8cmを測る。この他に下駄や板状製品など木製品が若干出土しているが、未整理のため、機会を改めて報告したい。

井戸205 (Fig. 24, Pl. 13, 14)

調査区端のD 4区で検出した。掘方の径2.3mを測る。井筒は南西側に偏っており、長70cm、幅10cm程の板材を20枚巡らして井筒としている。検出面からの深さは1.5mを測る。井筒内にかなり大きい躰が出土したが、廃棄の際の投棄であろう。

出土遺物 (Fig. 27)

図示した遺物はいずれも井筒内出土である。133～139は土師器小皿である。底部は糸切りで、135には板目が見られる。129～132は土師器壺。底部は糸切りで、130、132には板目がみられる。法量は表6の通り。140は龍泉窯系青磁皿である。平底で体部は腰折れ。見込に割花文を施す。141は土師質の鉢。口縁部は折り返して開く。胴部も肩曲する。内面と、肩曲部以下はハケメ、肩曲部以上はナデと思われるが、外面全体に煤が付着して不詳である。

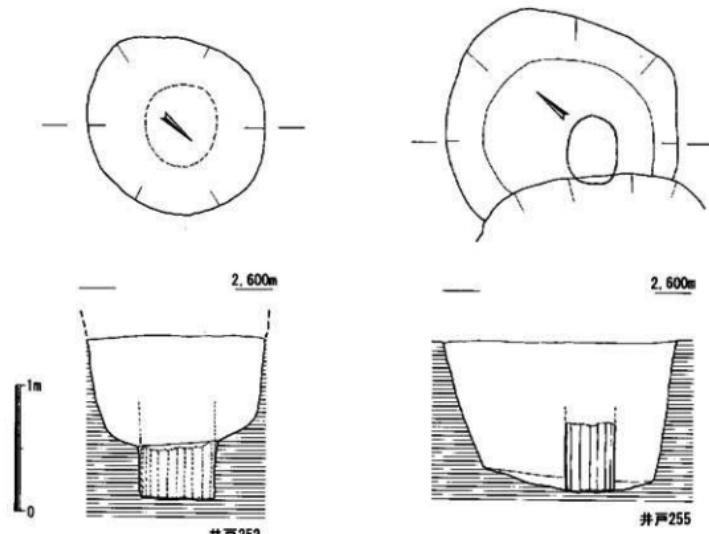


Fig. 26 III面の遺構実測図4 (1:40)

No.	口径	底径	器高	No.	口径	底径	器高
129	12.2	8.7	2.8	135	7.8	5.5	1.2
130	12.7	9.0	2.6	136	8.6	6.2	1.1
131	11.5	8.0	2.5	137	7.2	5.2	1.3
132	12.8	8.2	2.7	138	7.8	5.8	1.8
133	7.6	6.0	1.3	139	9.0	7.2	1.1
134	8.3	5.7	1.3				

表6 井戸205出土土師器法量(cm)

土壤208 (Fig. 24)

B 4区で検出した。円形を呈する土壤である。径1.5m程を測る。深さは1mほどあり、井戸の可能性もある。ただし井筒などは確認されていない。

出土遺物 (Fig. 27)

142は土師器坏。底部は糸切り。口径11.7、底径8.4、器高2.4cmを測る。143は土師器小皿。底部は糸切り。口径7.8、底径6.4、器高1.1cmを測る。144は白磁碗。体部は直線的に開く。内面に沈線を巡らす。高台から底部は露胎。内外面釉に水裂が著しい。

土壤210 (Fig. 24)

B 4区で検出した。土壤208に切られる。円形を呈する土壤である。径1.1m程を測る。深さは30cm程である。

出土遺物 (Fig. 27)

145は土師器小皿である。底部は糸切りで、板目が見られる。口径9.5、底径7.0、器高1.0cmを測る。

井戸249 (Fig. 25, Pl. 14, 15)

C D 3、4区で検出した。井戸2基の切り合いである。I面でプランのみ検出し、壁、床が不分明であった構造2と同一構造と考えられる。調査時の観察では、東側の井戸が古く、西側の井戸が切ると考えられる。西側の井戸は井筒跡のみ検出し、構造は不明である。円筒形の井筒で、径80cm程を測る。東側の井戸は板材による井筒である。長70cm、幅15cm、厚さ3.5cm程の板材を、それぞれ26枚づつ並べて一段の井筒を作っている。いずれの井戸もIII面からの深さ1.8m、I面からであれば3.0~3.1mを測る。

出土遺物 (Fig. 27)

構造2および井戸249の遺物は調査時にかなり混入して取り上げている上、取上げ後にコンテナ倒壊によって更に混乱しており、本来は種類、形態によって分別しなければならないが、時間の都合上行い得ていない。ここでは、確実に西側井戸の井筒内から出土した遺物を図示した。146、147はいずれも土師器。146は坏。底部は糸切りで、板目がみられる。口径13.0、底径7.6、器高3.4cmを測る。147は体部が内湾して立ち上がる。底部は糸切り。口径6.5、底径5.0、器高2.6cmを測る。

土壤251 (Fig. 24)

B 5区で検出した。梢円形の土壤である。比較的深く、また壁が立つ。長径1.7m、短径1.4m程を測る。深さは60cmを測る。

出土遺物 (Fig. 27)

148、149はいずれも土師器の丸底坏である。底部はヘラ切りで、板目がみられる。148は口径16.0、器高3.6cm、149は口径16.2、器高3.7cmを測る。

井戸252 (Fig. 26, Pl. 16-1)

C 5区の、井戸249の西側で検出した。円形で、径は1.4mを測る。ほぼ中央に井筒があり、板材を並べたものである。腐朽が著しいが、井筒径は55cm程を測り、井戸249と同程度の板材を20枚程度巡ら

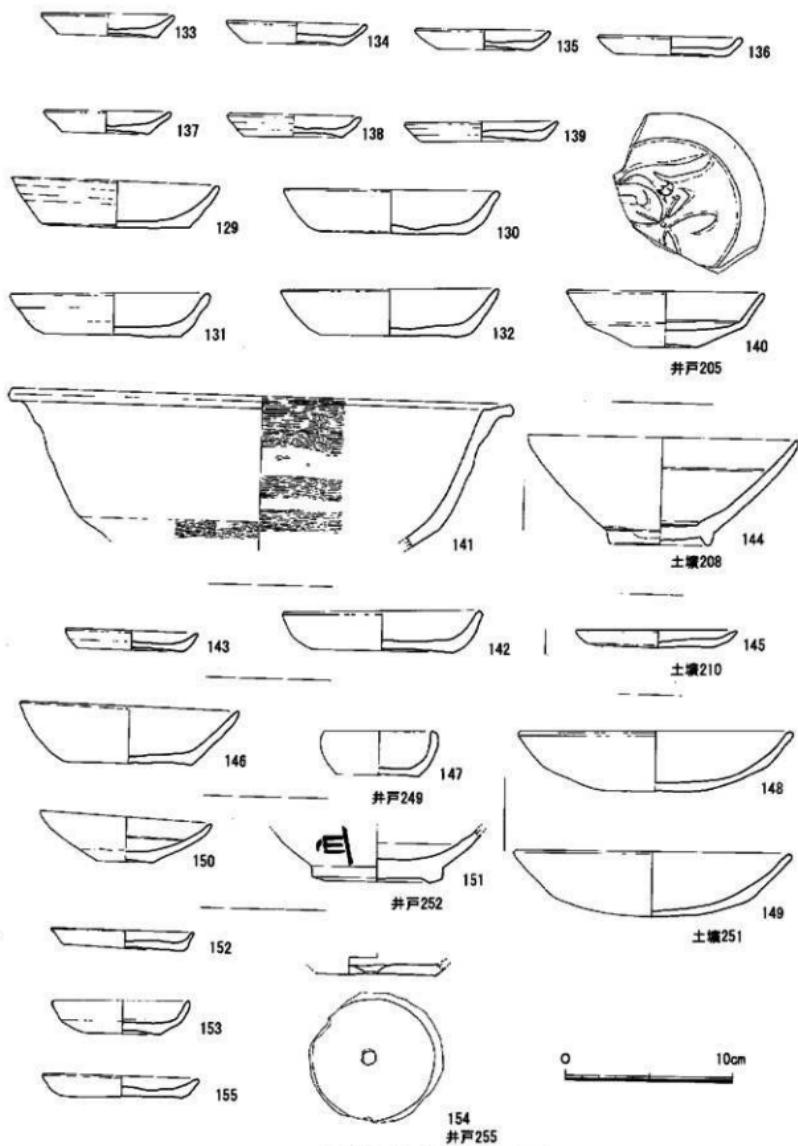


Fig. 27 III面遺構出土実測図 3 (1:3)

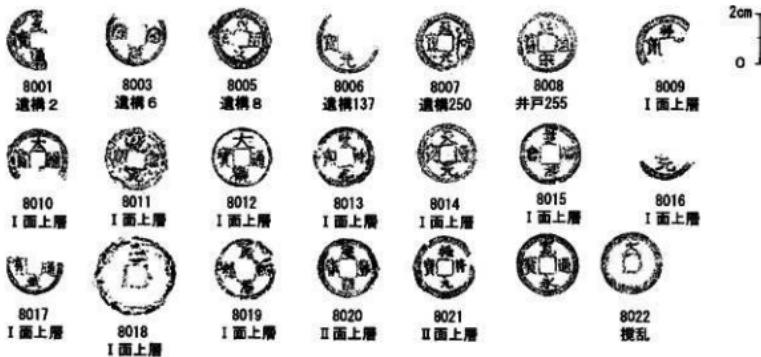
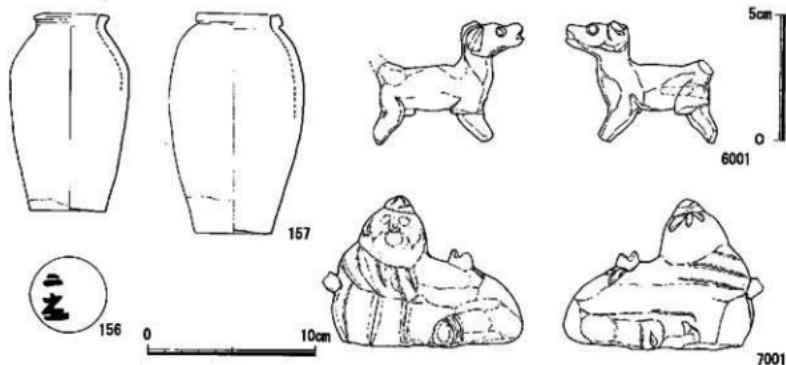


Fig. 28 その他の遺物実測図 (1:3) (1:2)

したものである。検出面からの深さ1.3mを測る。

出土遺物 (Fig. 27)

150は白磁の半底皿。体部はわずかに内湾しながら大きく開く。内面に沈線を巡らす。部分的に釉が白渦し、沈線の周囲がとくに顕著である。151は白磁碗底部。見込は広い。外面脇部下半以下は露胎で、横向きに墨書きがある。漢字であろうが、判読不明。

井戸255 (Fig. 26, Pl. 16-2)

D5区で検出した。井戸249に切られる。円形を呈し、径は1.9mを測る。南側によって井筒がある。やや梅円形にひずんでいる。井筒は長50cm、幅10cm程度の板材を並べておらず、長径50cm、短径40cmを測る。深さは1.2m程度である。

出土遺物 (Fig. 27)

152は井筒内出土の土師器小皿である。底部は糸切りで、板目が見られる。口径8.3、底径7.2、器高1.0cmを測る。154も井筒出土の小皿片である。底径7.2cmを測る。中央からややすれて穿孔する。焼成後である。153は白磁碗。体部は腰折れで、釉は厚く白渦する。釉には貫入がみられる。底部は上底

で露胎である。155は掘方山上の土師器小皿。底部糸切りで板目がみられる。

その他の遺物 (Fig. 28)

その他、特徴的な遺物を2、3紹介しておく。すべての遺物の検討は行っておらず、また、遺構に伴わない包含層の遺物については、ほとんど整理がついていないので、主に調査中に目に付いたものである。

156はⅢ面の遺構251出土の陶器壺である。完存品で出土した。砂粒が多いが比較的緻密な胎土に、透明感のある縁がかった釉を施す。口縁端部を面取りし、釉をかき取る。底部は露胎で、墨書きがある。「二(花押)」か。下の字も漢字かもしれない。157はB4区の2層(Ⅱ面からⅢ面への掘り下げ時)で出土した陶器壺である。口縁は玉縁状を呈し、端部を凹ませる。砂粒の少ない精良な胎土で、露胎部では明るい赤褐色を呈する。釉は灰色で濁っている。6001は土師質の犬形土製品である。頭は正面形三角形で、耳を立て、目が正面をむく立体的な造形である。尾は遺存状況から見て、折れ曲がっていたようである。尾の下に胸部中位に達する穿孔がある。B2区のⅠ面検出時に出土した。7001は白磁の水滴である。横臥の人物像を模したものか。底部は露胎。

出土銭貨 (Fig. 28)

今回調査の出土銭貨のうち、発掘中に抽出したものと遺構出土のものを図示した。()内は似た字体を持つ類例から推定したものである。錢文全文解読または推定できるものは、8001は元祐通寶。8007は至和元寶。8008は皇宋通寶。8012は大觀通寶。8013は(聖)宋元寶。8014は大型元寶。8015は(景德)元寶。8021は祥符元寶。8022は寛永通寶。一部破損または絞文がつぶれたものは、8005は元祐通寶。8006は口元口寶。8009は祥(符)(元?、通?)寶。8017は太(平?)通寶。8017は(洪?)武通寶。8020は天(豐?)通?)寶。8018は人錢で特徴的であるが錢文が判読できない。最も古いものは開元通寶で、最も新しいのは寛永通寶であるが、ほとんどが北宋錢である。また8017は洪武通寶(1368年初鑄)はⅠ面検出時の出土で、土器廐棄時の下限を示す遺物といえる。

第3章 小 結

博多遺跡群第105次調査は、博多浜を形成する砂丘1と砂丘2の間の谷部に位置し、博多で最も早く開発された地点に含まれている。近接する調査地点では弥生時代から生活の跡が見られ、中世まで延々と続けられているのである。今回の調査範囲は200m²程と狭く、また調査者の経験不足から十分に成果を上げたとは言い難いが、この地点における遺構の変遷を追いつつ、若干のまとめを行っておきたい。なお、出土遺物については、諸般の事情により、包含層、整地層出土の遺物はほとんど未整理のまま手がつけられなかった。従って、今後整理の機会があれば、大幅な遺跡解釈の修正がありうることをお断りしておく。

105次調査地点で、最もさかのぼる遺構は、不安定な砂洲状の地形に生垣残溝を捨てたと考えられる遺構201であろう。遺構201に付随すると考えられる遺構202、遺構203を含め、この施設遺構群の時期は12世紀代と考えられ、周囲の集落の拡大に伴ってまず施設場所として選定された場所であったと考えられる。また、Ⅲ面上にはこの面から掘り込まれたと考えられるビット、溝などが多数検出されており、小規模ながら町並みが形成されつつあったことも窺える。Ⅲ面検出のこの他の該期の遺構としては、土塙210、土塙251などの井戸以外の土塙がこれにあたると考えられる。

この後、焼土、炭、粗砂等を含む層により、細かい整地が行われており、本格的に生活面の拡大が行われている。その時期はほぼ13世紀代頃と考えられるが、確実なⅡ面からの遺構というものが今一つ

判然とせず、不明な点が多い。II面の遺構は七器溝り、井戸などを報告しているが、井戸102は確實に上面からの遺構であり、土器溝り101も遺物が検出されはじめたのは整地層の最上層より上位のレベルである。土器溝り117、118も同様である。またII面遺構では整地層の層理を遺構と誤認したものが多く、これらのものを除くと、II面の遺構は土壌110、土壌120、上壌135、土壌147が挙げられようが、ごくわずかなものになってしまふ。ただし、上層段で見ると整地層の上もしくは途中から掘り込むピットなどが見られるので、見落としも多いものと思われる。いずれにせよ確りとした整地を行っている割には遺構は閑散としているという点を特徴としてあげうるのではないか。

更にこの上層に暗灰色の砂質土の埋立てにより、第I面の遺構面が形成されるが、今回第I面とした面は、この面から掘り込まれた遺構群が埋められた後、上師器廐棄場所として使用された状況を調査したものと考えられる。従って土師器廐棄が行われる前の面をIb面としてまとめてみることにしたい。Ib面はIa面から30cm程下位で精査すればかなり状況が明らかになったであろうと思われる。人変残念なことである。

Ib面の主たる遺構は井戸である。というより、下面で確認したため、井戸のような深い遺構しか確認できなかったというのが実情である。105次調査で検出した井戸は全部で7基であるが、いずれもIb面からの掘り込みと考えられる。時期は13世紀後半頃であろう。井戸は井戸身の残るものは板材を円形に並べたもので、残らないものも、土層から円形の木質の井戸身であることがしられる。該期に至って周囲と同様な生活の場が、稍密に展開していることがしられよう。またII面の遺構101、土器溝り117、118などもIb面の遺構であろう。遺構101は最上面(Ia面)の上師器溝りと異なり、上壌内に埋納している可能性が強い。

このIb並びに埋められた後、調査地点は土師器の廐棄の場となる。この面(Ia面)では、不定形の土壌が主たる検出遺構である。これらの土壌の多くは、七器を捨てながら埋めていく埋立ての大まかな単位を示している様にも思われる。上師器はこの不定形土壌内に廐棄したように見えるもの(遺構4、遺構7)や、溝状につらなるもの(遺構1)、掘方を伴わないもの(遺構21)など各種がある。これらの廐棄の時期はおおむね14世紀と考えられる。

今回調査地点では、第I面より上位は既設の社物基盤により擾乱されており、この時期以降の状況は不明である。ただ、I面以下の各面において、15世紀以降の遺構は全く見られない。更なるかさ上げが行われている可能性もあるが、105次地点の南西側に位置する79次調査地点では、該期以降生活遺構が見られず、畠として利用されていたことが明らかとなっている。105次調査地点でも、なんらかの理由で該期以降生活の場としては利用されなくなっていたことも考えられる。

また今回調査を含め、周辺の調査により、砂丘1と砂丘2の間の谷筋が12世紀頃から生活の場として整備されていくことは、櫛田神社との関連からも興味深い。該期の櫛田神社の位置はまさに拡張しつつある都市博多の周縁を押さえる位置に当たるように思われるからである。

参考文献

- 博多遺跡群の地形的特徴、および遺跡全体の概要についての次の文献を参考にした。
磯望、下山正一、大庭康時、池崎謙二、小林茂、佐伯弘次「博多遺跡群をめぐる環境変化・大庭康時「中世都市博多の成立」・常松幹雄「博多遺跡群を見る埋立てについて」以上小林茂、磯望、佐伯弘次、高倉洋彰編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会1998年所収
また周辺調査区の報告書は以下の通りである。
4次調査「博多60」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集」・22次調査「博多III」「同第118集」・21次調査「博多IV」「同第119集」・67次調査「博多29」「同第284集」・79次調査「博多50」「同第447集」・80次調査「博多50」「同第448集」・103次調査「福岡市埋蔵文化財年報Vol. 12」なお99年度報告書刊行予定

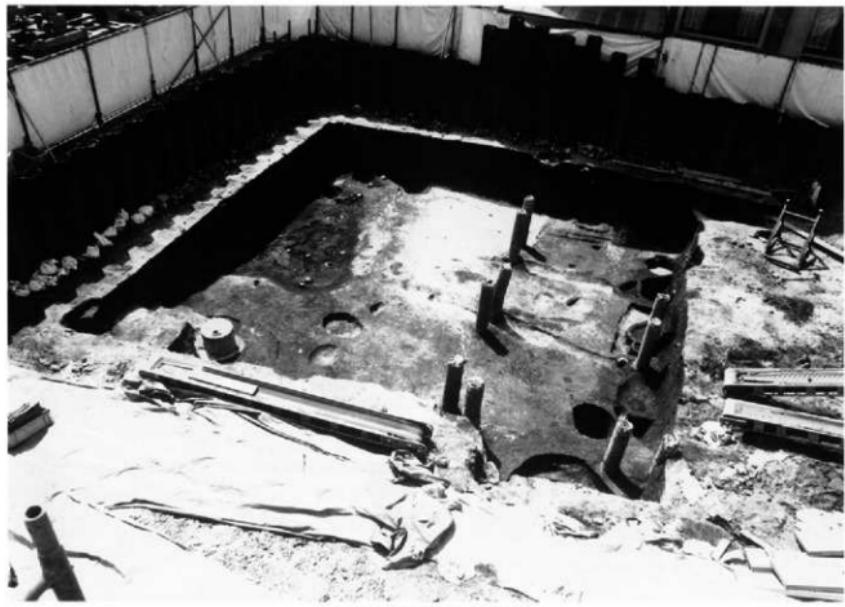
図 版



(1) I面全景（東から）



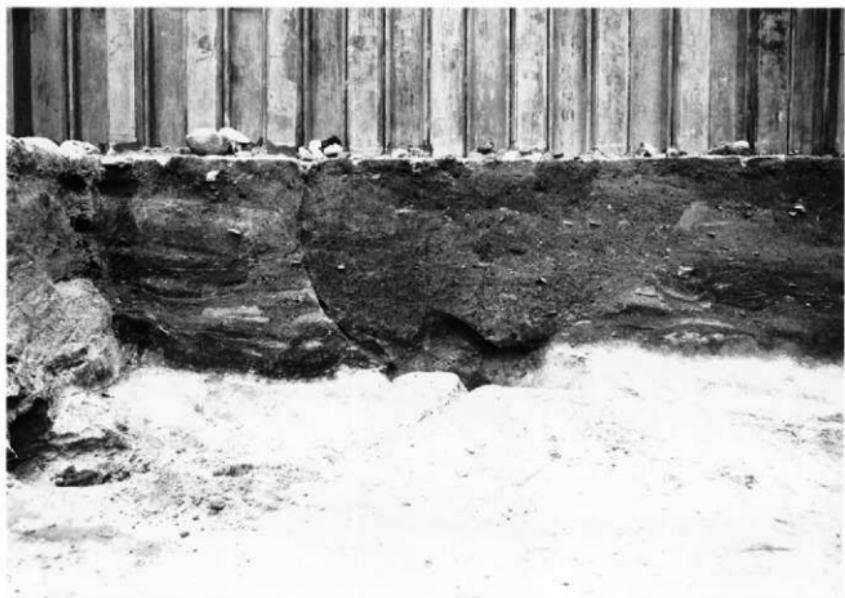
(2) II面全景（東から）



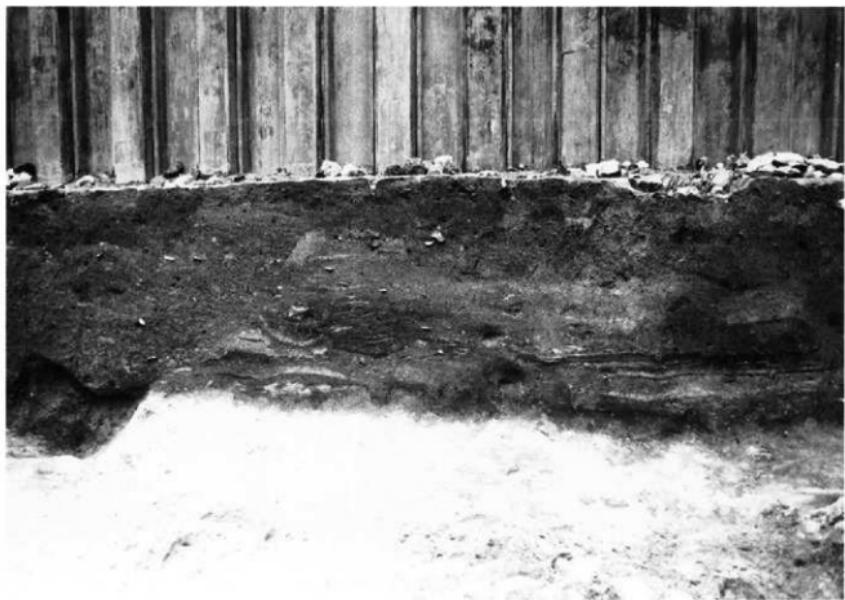
(1) III面南半部全景（東から）



(2) III面北半部全景（東から）



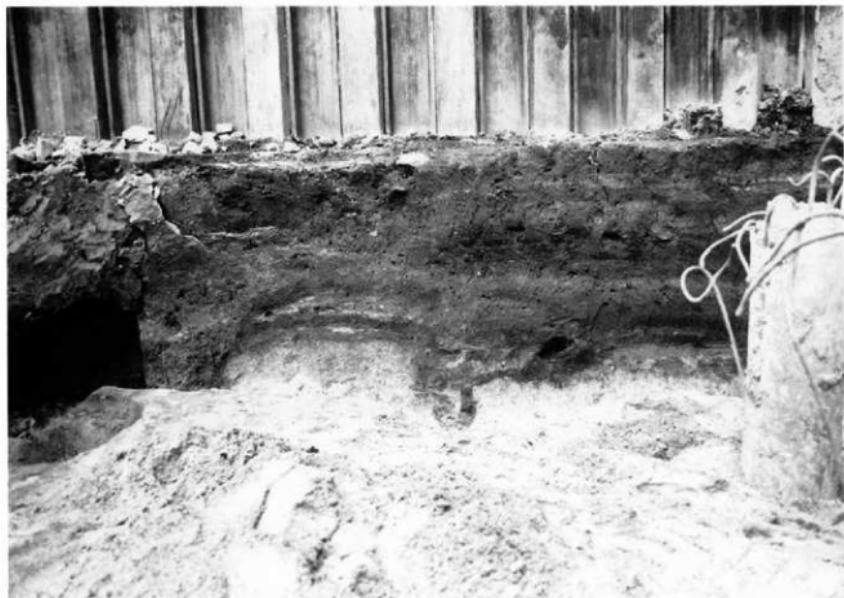
(1) 調査区西壁土層（2区）



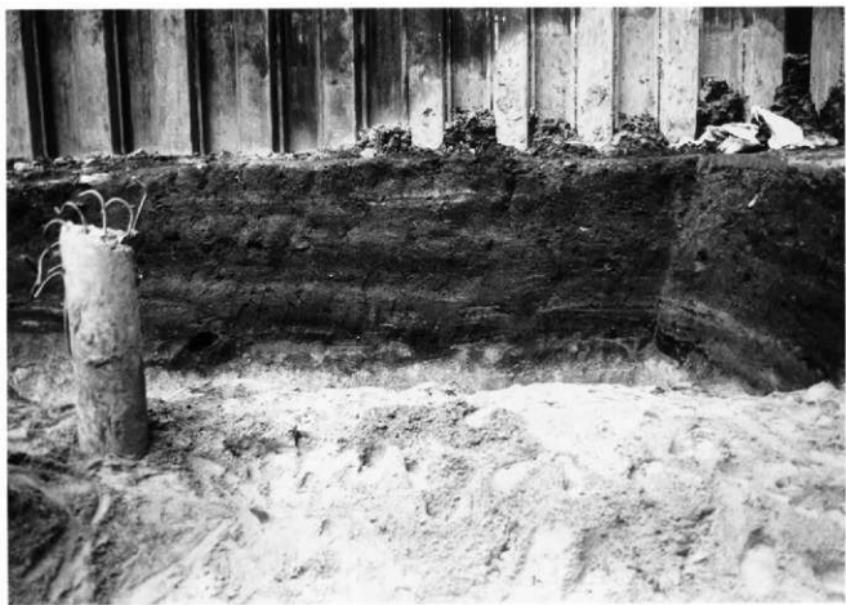
(2) 調査区西壁土層（3区）



(1) 調査区西壁土層（4区）



(2) 調査区西壁土層（5区）



(1) 調査区西壁土層（6区）



(2) 造構1（北から）



(1) 遺構 4 (南から)



(2) 遺構 7 (北から)



(1) 遺構21 (南から)



(2) 井戸5 (南から)



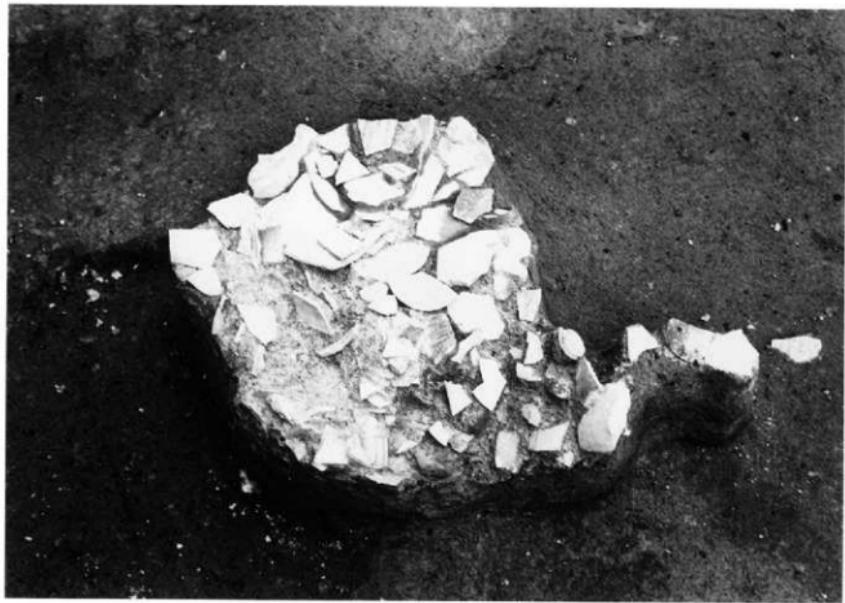
(1) 土壙101 (南から)



(2) 井戸102 (東から)



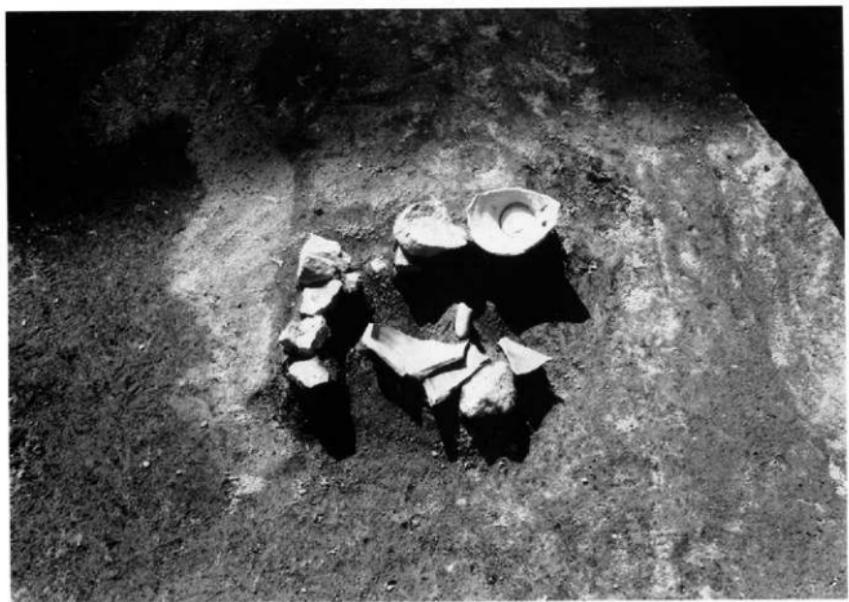
(1) 遺構114 (北から)



(2) 遺構117 (南から)



(1) 遺構118（北から）



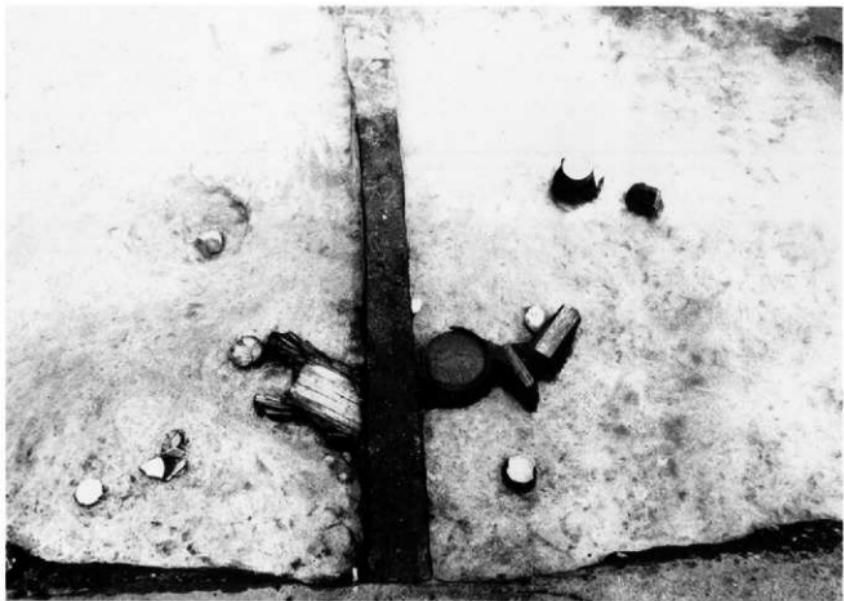
(2) 土壌120（東から）



(1) 土壌135 (南から)



(2) 土壌201 (南から)



(1) 土壌201遺物出土状況（南から）



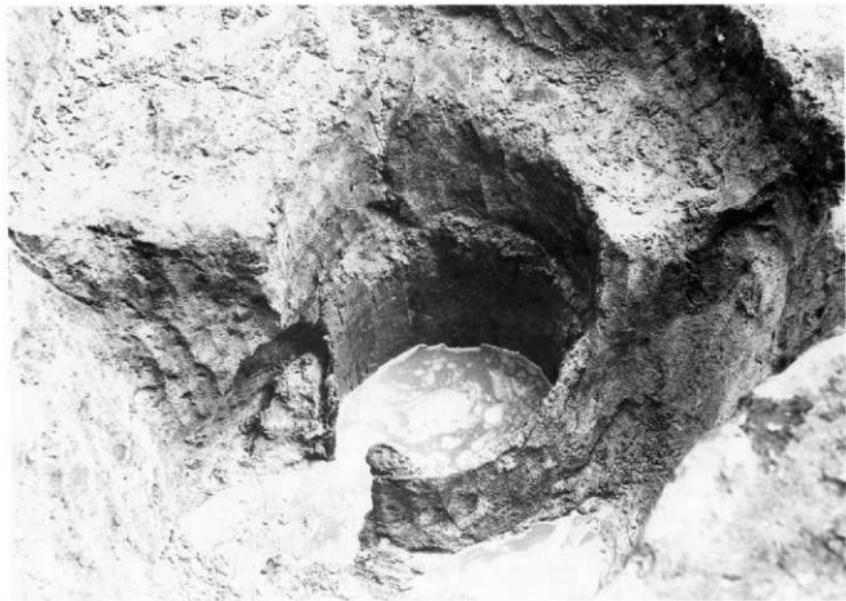
(2) 土壌201 土層



(1) 土壙203 (西から)



(2) 井戸205 (南から)



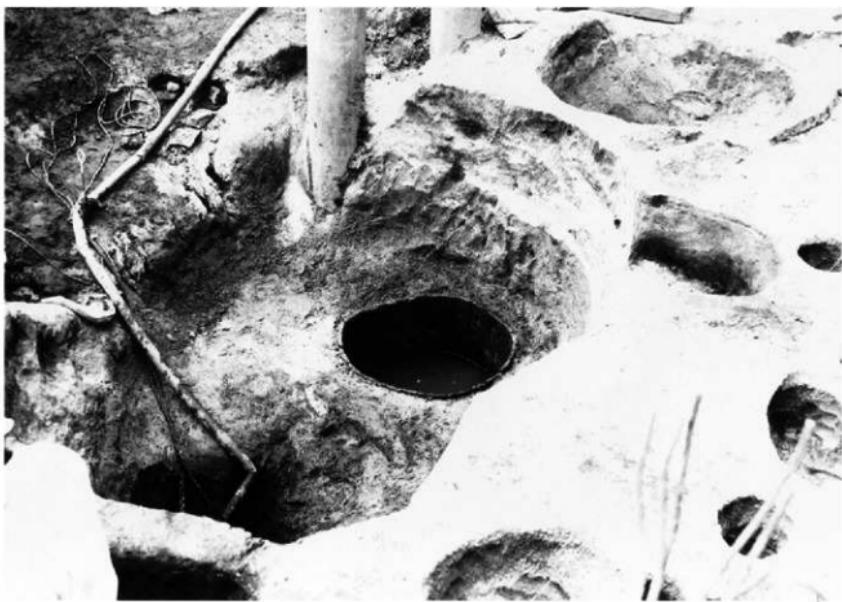
(1) 井戸205井筒（北から）



(2) 井戸249（西から）



(1) 井戸249井筒（南から）



(2) 井戸249完掘（西から）



(1) 井戸252 (北から)



(2) 井戸255 (西方・e₂)

はか
博 多 70
た

—博多遺跡群第105次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第628集

2000（平成12）年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 嶋井精華堂

福岡市博多区堅粕4丁目1番12号